



TITLE:

# ザンベジ川氾濫原におけるロジ社会の生業構造

AUTHOR(S):

岡本, 雅博

---

CITATION:

岡本, 雅博. ザンベジ川氾濫原におけるロジ社会の生業構造. アジア・アフリカ地域研究 2002, 2: 193-242

ISSUE DATE:

2002-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/79999>

RIGHT:

## ザンベジ川氾濫原におけるロジ社会の生業構造

岡 本 雅 博\*

### The Subsistence System in Lozi Society on the Zambezi River Floodplain

OKAMOTO Masahiro\*

In the central south Africa, several floodplains have played important roles in the formation of centralized societies in the past. The Zambezi river floodplain in western Zambia has been inhabited by the Lozi for about 300 years. On the floodplain, the Lozi people practice agriculture, cattle-raising, fishery, gathering, hunting and so forth. They have maintained a strong kingship system involving many ethnic groups.

The purpose of this paper is to examine and analyze the subsistence system on the floodplain. After describing the various activities in detail, the paper focuses on the following noticeable features. First, subsistence activities are adopted harmoniously to the ecology of the floodplain, which is composed of micro landform and annual floods. Second, the people have developed complex techniques that combine different subsistence activities. Third, while the kingdom organized engineering projects, such as constructing large-scale drainage canals in the 19th century, the water management methods at the village level remained relatively small-scale techniques. At the same time, a symbiotic relationship has been formed between the populations inhabiting the floodplain and the surrounding woodlands. This study is also an attempt to elucidate the factors behind the formation of the Lozi kingdom.

### は じ め に

中南部アフリカを流れるザンベジ川の上流域に形成されたバロツェ氾濫原を中心とする地域は、ロジ (Lozi) と呼ばれる民族のおもな居住域となっている (図 1)。マードックによれば、ロジは中央ザンベジ・バントゥ系 (Middle Zambezi Bantu) に分類されており、この系統に属する集団の大きな特徴として、農業とともに牛飼養に従事する点があげられている [Murdock 1959]。実際にロジは、農業とあわせて大規模な牛牧畜や漁撈など、複数の生業を営む人々である。またかつてロジは、バロツェ氾濫原を中心に強大な王国を形成し、その領域内には多数の民族集団が存在したことが知られている。

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

バロツェ氾濫原は、季節的に起こる洪水のために毎年数カ月間は必ず冠水し、そして数年に1度は大洪水に見舞われるという生態的特性を有している。こうした環境下で営まれるロジの生業については、生態学者のトラップネル、社会人類学者のグラックマン、農業行政官であったピーターズなどによって、早い時期からすぐれた研究が蓄積されてきた [Trapnell and Clothier 1937; Gluckman 1941; Peters 1960]。ロジ社会における生業の変容を押さえるという点において、これらの研究がもつ価値はきわめて大きい。

しかしながら、いずれの研究も複数の調査地で得られた資料を包括的に論じる方法をとっているため、個々の生業活動がいかなる仕組みのもとに、どのような機能連関をもって営まれているのかという理解が得にくいものとなっている。また、それらの記述はとくに農業に偏重しており、牧畜をはじめとする他の生業については十分に触れられていない。

これらの先行研究を踏まえつつ、本稿では現在のロジの多様な生業活動を村落レベルで詳

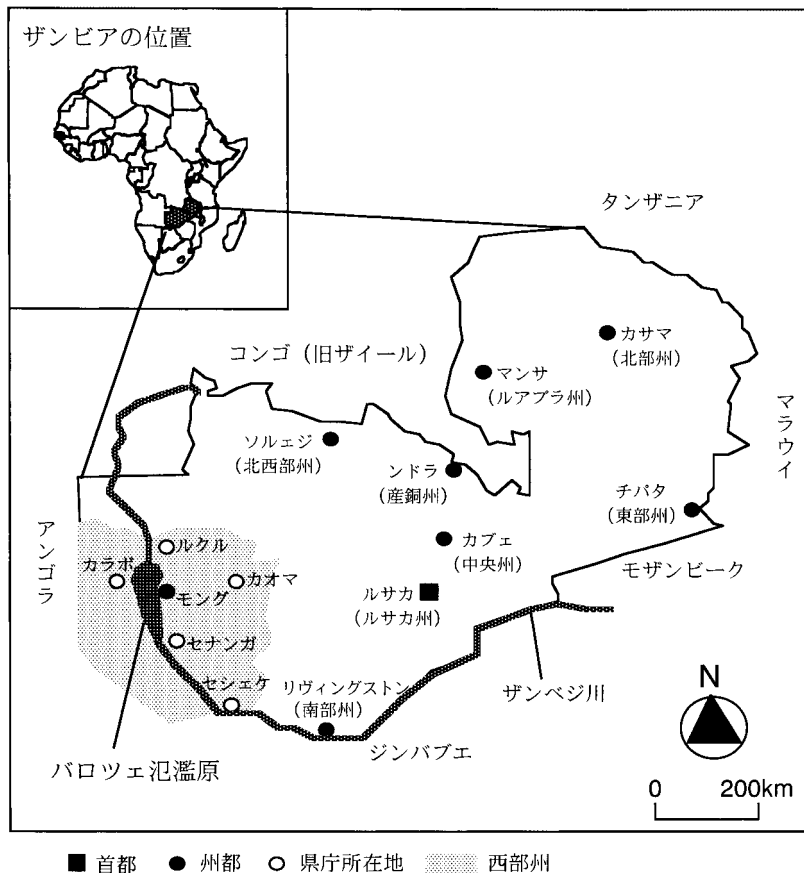


図1 バロツェ氾濫原の位置

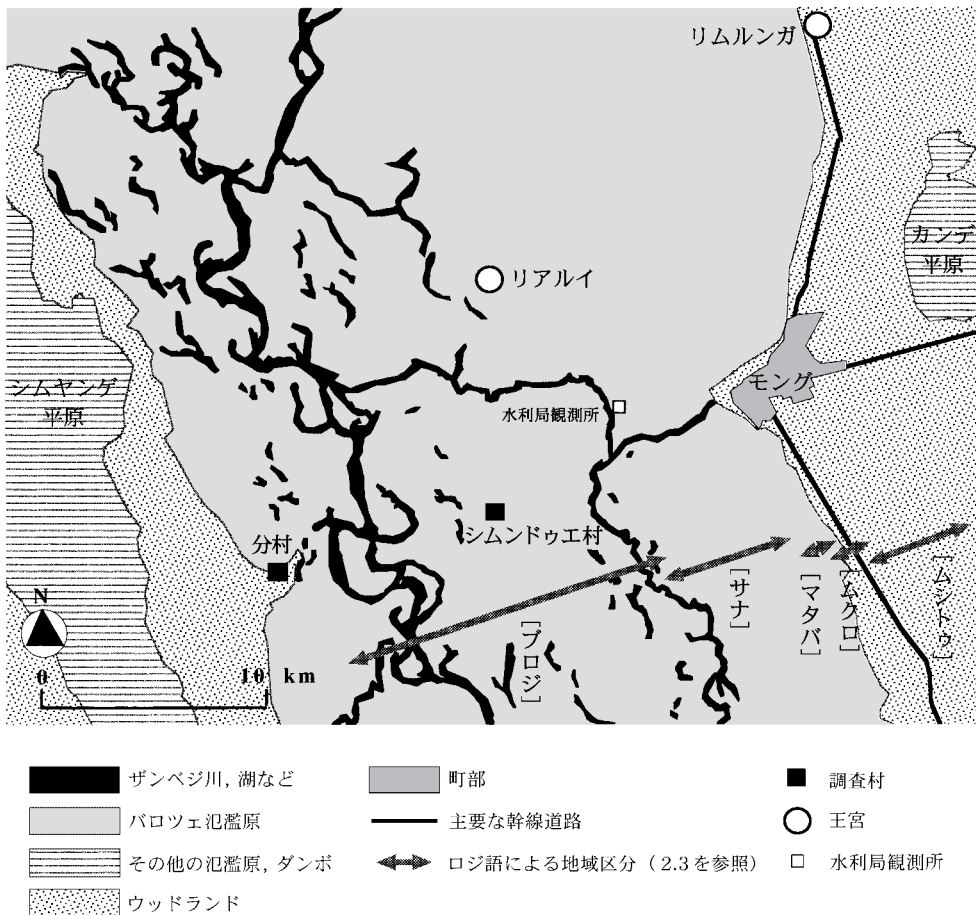


図 2 調査地およびその周辺地域の区分

細に記述し、生業構造を明らかにすることを目的とする。とくに、この地域が氾濫原という特異な生態環境であることに注目し、(1) 定期的に起こる洪水や地形構成などの生態環境と生業の関わり、(2) 諸生業間における相互連関の諸相、(3) ロジの水利用技術の特質、(4) 氾濫原の生業と氾濫原の外部に広がるウッドランドとの関係、などの諸点に留意しながら、氾濫原における生業の特性を構造的に明らかにしたい。これはロジ王国が展開した生態的基盤を解明する試みでもある。

本研究は、1999年2月から同年12月までと2000年12月から2001年5月までの計2回、延べ15カ月間にわたり、ザンビア共和国西部州モンク県、パロツェ氾濫原の中央域に位置するシムドゥエ (Simundwe) 村とその分村に滞在して実施した現地調査を基礎としている (図2)。

## 1. ロジについて

### 1.1 ロジの歴史

300 年以上にわたりロジは、バロツェ氾濫原を主たる居住域としてきたと推定されている [Mainga 1973: 214]. ロジの起源に関しては諸説があるが、現在のコンゴ民主共和国 (旧ザイール) の地にかつて栄えたルバ王国やルンダ王国などから南下し、バロツェ氾濫原に定着した人々が、現在のロジの始祖であるとする説が有力である。これらの人々は氾濫原を中心に王国組織を築きあげ、近隣の諸集団を支配下に治めていった。また集団の分裂や他地域からの民族集団の移住などにより、かつての王国領内には数多くの民族集団がロジのサブ・グループとして存在する。<sup>1)</sup>

ルバ王国やルンダ王国などから移動してきた当時、彼らはロジではなくルヤナ (Luyana),あるいはルイ (Lui, Luyi) と呼ばれていた。現在、自らをルヤナまたはルイと名乗る人々はいないが、ロジの人々はこうした名称や歴史的経緯を広く認識しており、ルヤナ (ルイ) とは「氾濫原や川などを居住域とする人々である」と語る。

1830 年代には、ソト語系のコロロ (Kololo) が侵略してきた。コロロは、南部アフリカで強力な軍事力を誇ったズルー王国から逃れてきた人々を指す総称である。ルヤナ (ルイ) の王権は、一時的にコロロによって奪われたが、バロツェ氾濫原の北西域 (現在のカラボ県) に撤退していたルヤナが 1864 年に王権を奪回した。しかしコロロの侵入による影響は大きく、当時のルヤナ語がコロロ語と融合して現在のロジ語となった。また、ロジという名称が用いられ始めたのもこの頃であり、支配者のコロロたちが「ルイ」を訛って「ロジ」と呼ぶようになったとみられている [Turner 1952: 9]. ロジ王国の領域は、バロツェ氾濫原を中心としつつ、その外部に広がるウッドランドを含む範囲をカバーしており、現在のザンビア国の西部州にほぼ相当する。1990 年におけるロジの人口はおおよそ 33 万人である [Central Statistical Office 1994].<sup>2)</sup>

### 1.2 ロジ王国

現在のザンビア国に相当する地域は、19 世紀末に英国領北ローデシアとして植民地化されたが、その領内でロジ王国だけは、英国保護領として自治権が認められ王国制度が存続した。ところが 1964 年にザンビア国が独立したときには、ロジ王国は西部州 (Western Province) としてザンビアを構成する 1 つの州に組み込まれ、王制はその公的根拠を失った。かつては広範に行われていた王への生産物の貢納 (ヌブ, *nubu*<sup>3)</sup>) は、現在ではごく一部の村を除いてはみ

1) グラックマンは、ロジ王国を構成する 25 もの民族名を記載している [Gluckman 1941].

2) ザンビアでは民族集団ごとの人口統計は行われていない。ここであげた数値は、西部州に居住しロジ語を第一言語として話す者の数である。

られなくなっている。

しかし、ロジ王国の存立の基盤は、現在も形を変えて持続しているといえる。たとえば、王（パラマウント・チーフ）を頂点としたピラミッド型の統治機構は、国の行政機関と並立して存続している。すなわち、リトゥンガ (*litunga*) と呼ばれる王の下には、シラロ (*silalo*)<sup>4)</sup> というロジ独特の行政単位が設定されており、シラロ・インドゥナ (*silalo induna*) と呼ばれるローカル・チーフが任命されている。そしてこの位階秩序の末端部を支える村々には、村長（ムガ・ムンズィ, *muña munzi*）が配置されている。領内のすべての土地は王に所属すると考えられており、王は村ごとに土地を分与し、さらに村長が主要な耕地を各個人に配分する。原則的に耕地は、村に居住する住民のみに使用権が認められている。使用者が死亡したり村を離れたりした場合には、改めて村長が他の居住者に配分する。このように従来からの土地制度が保持されている。

現在で 22 代<sup>5)</sup> を数えるロジの王は、至高神ニャンベ (*Nyambe*) の子孫であると伝えられている。元来、ロジの王は、大地 (*the earth*)、土地 (*the land*)、国土 (*the country*) そのものとみなされ、土地の肥沃度や国土の豊饒さ、あるいは人々の福利などを司る存在であり、「神なる王」(*divine king*) としての性格をもちあわせていた [Brown 1998: 16]。氾濫原の各所には代々の王の墓地（スイティノ, *sitino*）が設けられた村々が点在し、現在でも人々の信仰の拠点となっている。

また毎年、王室を中心として活況を帯びた祭儀が繰り広げられる。バロツェ氾濫原の内部にある王都のリアルイ (*Lealui*) (図 2) の周囲は、3 月頃に浸水し始める。そのため洪水水位が上昇すると、王は 100 名ほどの男性が漕ぎ手（ムフルヒ, *mufuluhi*)<sup>6)</sup> となる大型の木造船に乗り込んで、氾濫原の外部に設けられたもう 1 つの王宮であるリムルンガ (*Limulunga*) に移動する。この木造船による王の移動はクオンボカ (*kuomboka*)、あるいはクオンボカ・セレモニー (*kuomboka ceremony*) と呼ばれ、内外からの数万人の観衆で賑わう。それはこの地方におけるもっとも盛大な祭儀といってよい。洪水水位が下がると王は氾濫原にある王都のリアルイに戻り、これはクフルヘラ (*kufuluhela*) と呼ばれている。<sup>7)</sup>

3) 本稿において、初出の現地語はイタリックのローマ字で示すこととする。バントゥ語系に属するロジ語では、いくつかのクラスに分かれている名詞は単数、複数で接頭辞を異にするが、原則として単数形を記載する。またロジ語の正字法では、鼻音をともなう 'ng' という発音を 'n', 'ch' という発音を 'c' と表記するが、本稿でもこの表記を採用する。

4) モング県は 21 のシラロに分割されている。各シラロは名称をもち、シムンドウエ村はシラロ・トゥンギ (*silalo Tungi*) に属する。

5) ロジにおける王の系譜については諸説があり一致をみていないが [Mainga 1973: 215]、ここでは Kuomboka-Kufuluhela Committee [1993] によった。

6) 王の船の漕ぎ手となるには、強靱な体力と熟練した櫂捌きの技術が求められ、ロジの男にとり最大の名誉と考えられている。

7) 1999 年におけるクオンボカは 3 月 27 日、クフルヘラは 5 月 27 日に実施された。

## 2. バロツェ氾濫原の概況

### 2.1 バロツェ氾濫原の位置と洪水

バロツェ氾濫原は、海拔約 1,000 メートルのザンベジ川上流域に形成されている。この氾濫原は約 8,000 平方キロメートル（南北 160 キロメートル，東西の最大幅 48 キロメートル）の広がりを持ち，周辺の台地部よりも数十メートル程度落ち込んだ低平な地形をなしている（写真 1）。その一帯は，マメ科やイネ科をはじめとする多種の草本類が広く繁茂するグラスランドであり，樹木の叢生は少ない。ロジの神話では，ザンベジ川や氾濫原の外部に広がるウッドランドとともに，至高神ニャンベがこの氾濫原を創造したとされている [Jalla 1996]。

この氾濫原は地図上では，ザンベジ氾濫原 (Zambezi Floodplain)，ザンベジ川氾濫原 (Zambezi River Floodplain)，バロツェ平原 (Barotse Plain)，あるいはバロツェ氾濫原 (Barotse Floodplain) などと記載されている場合が多いが，現地では，ングル (Ngulu)，リヨンド (Liyondo)，プロジ (Bulozi) などと呼ばれている。また，リバラ (*libala*) という言葉が用いられることもあるが，これは固有名ではなく，氾濫原を含めた一定の広がりをもつ平坦な地形を総称する名称である。ングルおよびリヨンドはルヤナ語起源の言葉であり，現在では耳にすることは少ないが，プロジという名称は日常会話のなかで頻繁に使用されている。もともとは「ロジの場所，ロジの人々が住む場所」を意味するが，「氾濫原の中央域」や「ロジ王国の領域（現在の西部州）」などを示す場合にも用いられる。<sup>8)</sup>

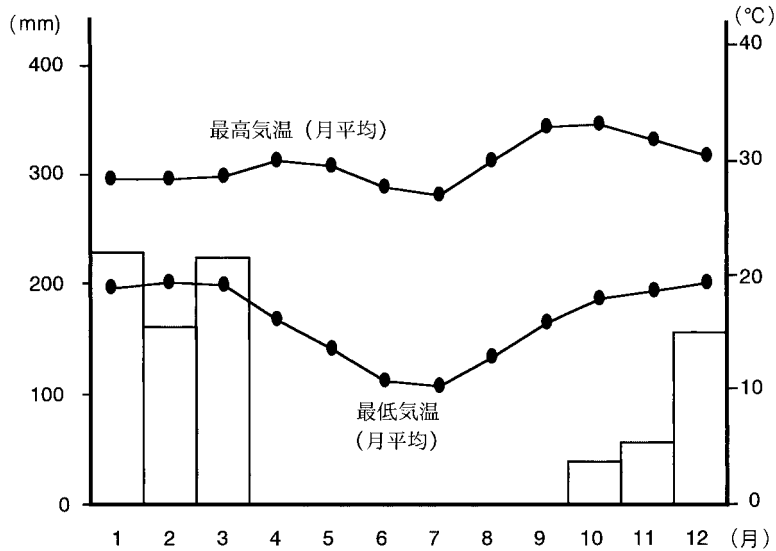
氾濫原の 1 年間は明瞭な 3 つの季節に分かれる。4 月中旬から 8 月中旬にかけての冷涼乾季（マリハ，*malihā*），8 月中旬から 10 月にかけての暑熱乾季（ムブンビ，*mbumbi*），そして 11



写真 1 モングの町から眺望するバロツェ氾濫原

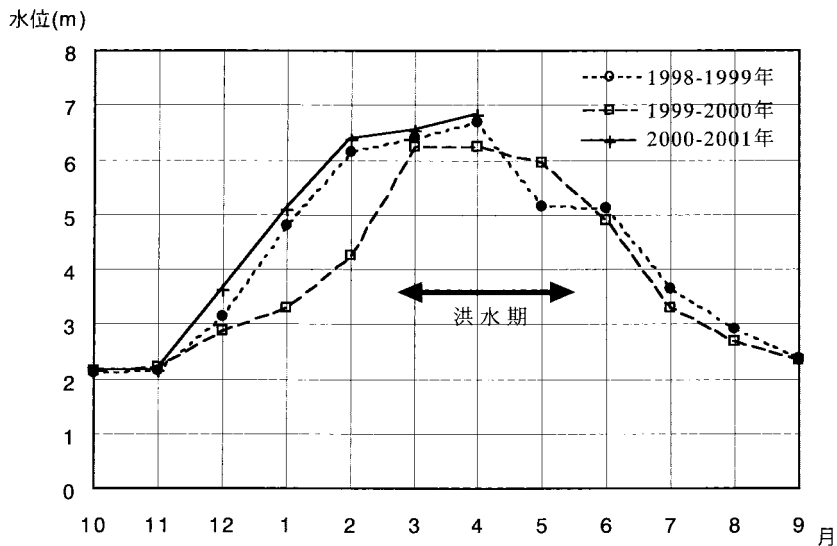
8) このように「プロジ」という語は用いられる文脈によって意味が異なるが，本稿では氾濫原の中央域を示すときにはプロジを用い，氾濫原全体を指す場合にはバロツェ氾濫原，あるいは単に氾濫原と記すこととする。プロジについては，2.3 で触れる。

月から4月頃までの雨季（リタブラ, *litabula*）である。モングの町にある気象観測所で計測された月ごとの気温と降水量を示したのが図3である。年間降水量は、800～1,100 ミリメートル程度である。ロジの季節分類で特徴的なのは、これらの3つの季節のほかに洪水期が存在する



注：モング気象局事務所の資料による。

図3 モングにおける月別の最高・最低気温と降水量（1999年）



注：水利局モング事務所の資料をもとに作成。

水位0メートルは、この観測地点における基準点である。

図4 バロツェ氾濫原における月ごとの最高水位の変化



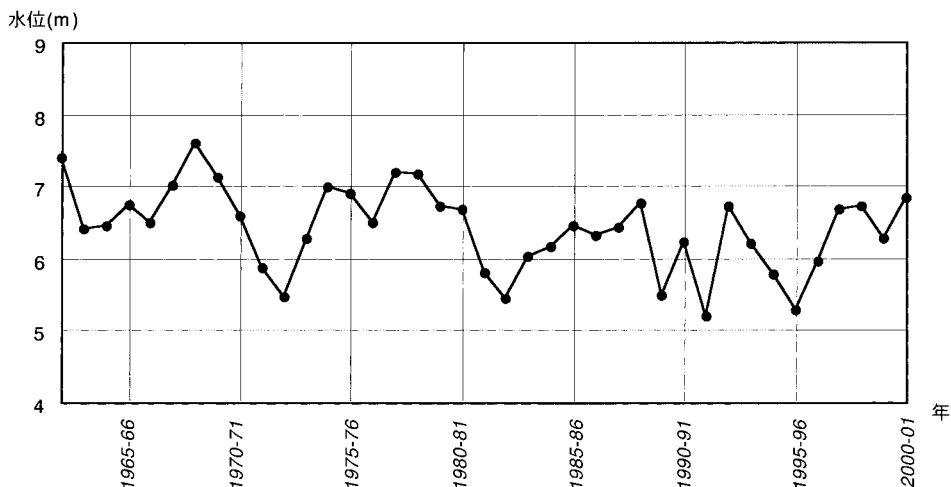
ことである。氾濫原が冠水する2月頃から5月頃までの期間が、洪水期（ムンダ、*munda*）と呼ばれている。

氾濫原における洪水域の範囲と洪水の水位は、ザンベジ川本流やその支流の水位と連動している。氾濫原の中央部を流れるザンベジ川の水位が上昇すると、凹地を伝って洪水域が拡大する。図4は氾濫原を流れるザンベジ川の一支流にある観測地点（ザンビア水利局）<sup>9)</sup>における月ごとの水位の変動を示しており、最高水位（3～4月）と最低水位（10～11月）との差は、4メートル以上ある。氾濫原における洪水位の昇降のパターンもこれとほぼ同様である。水位が高い時期には丸木舟が主要な交通手段となり、洪水が引くと徒歩での移動が可能となる。

観測地点における39年間の最高水位の変動を示したのが図5である。最大値を示したのが1968-69年度の7.59メートルであり、最小値は1991-92年度の5.19メートルである。その差は2.4メートルもあり、洪水の規模は年ごとに大きく変異するといつてよい。氾濫原の農業生産は洪水による影響を受けやすく、とくに水位が高い場合には冠水によって農作物が不作となることがある。筆者が調査を実施した1998-99年度と2000-01年度は、いずれも洪水位の高い年であった。

## 2.2 パロツェ氾濫原の過去と現在

1850年代にザンベジ川流域を踏査したD・リヴィングストンは、南方から北上してパロツェ氾濫原にいたっているが、その時の印象を以下のように描写している。



注：水利局モンク事務所の資料をもとに作成。

水位0メートルは、この観測地点における基準点である。

図5 パロツェ氾濫原における年ごとの最高水位の変化

9) ザンビア水利局ではザンベジ川流域に水位観測所を設け、水位の高さを毎日3回、定期的に計測している。水位観測所の位置については図2を参照のこと。

そのあたりへくると、高い木の茂った両方の河岸が河を離れ、次第に北北東と北北西に遠のいて、高さ 8,90 メートルもある山の背となり、最後に山の背はお互い 50 キロの遠くに離れていた。その真中あたりをザンベジ川がうねうねとゆるやかに流れ、長さ約 160 キロもある、二つの山の背の間の土地が、バロツェ氾濫原なのである。

ロジの村々は小山の上にあつて、河水が氾濫して谷全体が大きな湖のようになると、それらの村々は水に囲まれて、小さな島ようになる。土地は肥沃で年二回穀物を収穫することができる。ロジはこの土地を非常に愛している。ザンベジ川は「生命と生气」をはこんで、この土地の上にひろげてくれるのである。彼らは「ここではひもじい目にあう人は一人もいないのです」という [リヴィングストン 1977: 140]。<sup>10)</sup>

150 年前に記録されたバロツェ氾濫原の風景は、現在でもそれほど大きく変わっていない。水位が上昇すればザンベジ川は氾濫し、そのピーク時には氾濫原全体があたかも湖のようになるのは現在でもまったく同じである。洪水時には、水に浸かった植物が頭を出しているほか、集落や耕地などがある一部の高まった場所だけが、かろうじて水面下に沈むことなく、実際に島のように点在する。

現在では、氾濫原のなかを送電線が走り、水上交通を容易にするための運河がいくつか掘られている。そして従来からの丸木舟だけではなく、エンジン付きのボートも運行している。未舗装ではあるがモンゴとカラボのあいだを結ぶ自動車道路が開通し、その途中のザンベジ川本流には車輛や通行人を運ぶための平底ボートが配置されている。また、植民地政府によって 1900 年代初頭に創設されたモンゴの町には、各種の役所のほか、市場や商店、銀行、大型病院、高等学校などがあり、西部州の州都として、この 100 年のあいだに目覚ましい変化を遂げた。

ザンベジ川の中流域では、1950 年代以降にカリバやカホラバッサなどの巨大ダムが建設されたために周辺の生態系が大きく変化し、数万人単位の住民が強制移動を余儀なくされ、人々の生活は激変した [Colson 1971; ピアス 1995]。中流域のこのような変貌と比べれば、上流域のバロツェ氾濫原そのものの生態環境は大きくは変化していないことを強調しておきたい。そしてリヴィングストンが記録したような、1 年に 2 度の収穫が可能である氾濫原での農業は、現在でも重要な生業として存続している。

氾濫原の自然は人に災厄をもたらしもする。ザンベジ川には現在でもワニやカバが生息している。実際に筆者の滞在期間に、調査地の近くで現地の男性がワニに襲われて死亡している。丸木舟が転覆したり、氾濫原の浅瀬を歩いていた人が深みに足を取られて溺死するといった水

10) 「レーアンプエ河」をザンベジ川に、「バロツェ谷」をバロツェ氾濫原に、「バロツェ人」をロジと変えて引用した。

難事故もしばしば起きている。また湿地的な環境は、マラリアを媒介するハマダラ蚊の温床であることも事実である。そして洪水時には、人々の住居までが浸水してしまうのである。

それでもロジの人々の多くは、そこでの生活を讃え、その豊かさについて語る。バロツェ氾濫原に対する愛着心は、ルヤナ語によって伝えられている叙事詩（リロコ、*liloko*）にも表れている。

*Liyondo lya Inwa*（この氾濫原はイングワ<sup>11)</sup>のもの）

*Inwa mina Liyondo*（これはイングワの氾濫原）

*Lya isililagweka*（ここでは泣き声は聞こえない）

*Lya meibei*（水は近くにあり）

*Lya mulilokule*（火は遠くの彼方にある）

*Liyondo nokondo mana*（氾濫原の傾斜はゆるやかで）

*Sicimba mugonde*（ここには平和がある）

氾濫原の豊かさは、定期的な洪水によって肥沃になる土壌や、広大な牧草地、洪水がもたらす多種の魚、あるいは豊富な水そのものを意味してもいよう。氾濫原という生態環境は、そこで生存するための知識や技術をもつ者にとっては、きわめて恵み深い豊かな土地である。このような環境を主たる居住域とし、アフリカ大陸のなかでも有数の強大な王国を築いたのが、ロジと呼ばれる人々である。

### 2.3 氾濫原を中心とした地域区分

バロツェ氾濫原の内部は、大きく次のように分類されている（図 2）。まず中央域のザンベジ川を取り巻く地帯はプロジ (*bulози*) と呼ばれている。このプロジの外縁部にはサナ (*sana*) と呼ばれる地帯が広がり、そしてサナの外側は氾濫原外部の台地からの地下水が染み出るマタバ (*mataba*) と呼ばれる帯状の地帯となる。<sup>12)</sup>

プロジはザンベジ川の蛇行域であり、流路の移動にともなって形成されたとみられる起伏の高低が目立つ。いっぽうサナには流路が存在した形跡はみられず、その起伏は一般になだらかである。サナにも村は分布するが、後述するムクロ地帯に住む人々が主として放牧地や耕作地として利用している。マタバでは、湧き水により多量の水分を含んだ土壌を利用して、シシャンジョ (*shishanjo*) と呼ばれる耕地が造成されている。かつて、ここでは歴代の王のイニシア

11) イングワとは、ルバ王国あるいはルンダ王国から南下してバロツェ氾濫原に定着した人々の後裔であり、この土地で初めて生まれた男性の名であると伝えられている。

12) 調査地があるモンゴ県では、サナとマタバは氾濫原の東側のみに分布し、西側にはみられない。その理由として、この地域ではザンベジ川本流が西寄りの位置を流れていること、西側のウッドランドがシムヤンゲ平原によって分断されており（図 2）、東側と比較して氾濫原に染み出る地下水量が少ないことなどが考えられる。

チブのもと、シシャンジョの排水を目的とした大規模な水路が建設されたことが知られている。

氾濫原と台地の境界域となる斜面の部分はムクロ (*mukulo*) と呼ばれている。西部ザンビアの一角はカラハリ砂土が広域にわたって分布しており、ムクロはこのカラハリ砂土によって覆われている。現在、ムクロは人口の密集地帯となっているが、<sup>13)</sup> 元来は氾濫原に居住する人々が洪水期の数カ月間、一時的に避難するための場所であった。ところが氾濫原内の人口が増加し、とくに植民地期にモンゴの町が創設された氾濫原の東側では、市場や学校などのインフラが整備されたこともあり、年間をととしてムクロに定住する人々が増加した。

氾濫原の外側の台地に広がるウッドランドやブッシュはムシトゥ (*mushitu*) と呼ばれ、ムクロと同様に広く砂土に覆われている。従来よりムシトゥは、バロツェ氾濫原の西方域（現在のアンゴラ）から移住してきたブンダ (Mbunda) やルヴァレ (Luvale) などの民族集団が居住する場所であった。彼らはムシトゥに分布する小河川や小湿地の近くに村を設け、おもにウッドランドで焼畑を拓きトウジンビエやキャッサバを作付けして生計を維持してきた。<sup>14)</sup>

## 2.4 ブロジの地形分類

ロジに伝わる叙事詩のなかで、バロツェ氾濫原は「傾斜はゆるやか」と形容されているが、その中央域のブロジは起伏に富んだ地形をもつといつてよい。そして人々はこのような地形を、土壌や植生の特質や水分状況、あるいは比高差などを基準として分類し、それぞれの地形に名称を付与している。

分類の基準となる諸要素は相互に関連していると思われるが、ここではとくに地形名称と比高差との関係に注目したい。すなわち比高差に対応した微細な分類が認められ、なかには数十センチメートル程度の比高差であっても異なる地形として認識されている場合もある。こうした詳細な認識・分類がなされていることは、人々の生業や生活が季節的な洪水水位の変化と強く結びついて営まれていることと深く関係しているに違いない。以下、氾濫原の中央域であるブロジの地形を、比高の低い順に凹地・微凹地・微高地と分けて説明をすすめる（表 1）。

### (1) ブロジの凹地

ザンベジ川のロジ語名はリャンバイ (Liyambai) であるが、このような大きな川をヌカ (*nuka*) と呼ぶ。ザンベジ川は氾濫原のなかを大きく蛇行して流れているが（図 2）、長い時間幅のなかで流路が変化することがある。この過程で、かつての流路は新しい流路に隣接したシファンバイ (*sifambai*) と呼ばれる三日月湖となる。また現在の流路からやや離れた所には、年間をと

13) 1950 年頃の 1 平方キロメートルあたりの推定人口密度は、氾濫原の内部が 6~10 人であるのに対し、ムクロでは 12 人~15 人とやや高い [Peters 1960: 54]。1990 年の政府による人口統計をもとに各地域の人口密度を算出すると、氾濫原の内部が 20 人、ムクロが 294 人、ウッドランドが 16 人、モンゴの町部が 260 人となる。

14) 焼畑によって開墾した耕地をリテマ (*litema*) と呼ぶ。トウジンビエやキャッサバなどの栽培作物とともに、焼畑の技術はブンダによってロジに普及したという。

表 1 プロジ（氾濫原中央域）における主要な地形名称

	地形名称	地形の特徴	冠水の程度 <sup>1)</sup>	おもな利用方法 <sup>2)</sup>
凹地	ヌカ	川（ザンベジ川）	+++++	刺網漁
	リサ	湖	+++++	取水、水浴、牛の水飲み場、刺網漁、ヤス漁、
	シファンバイ	三日月湖	+++++	刺網漁
	シワタタ	凹地（リサより小規模）	++++	籠漁
	リティンディ	草本が高密度で茂る凹地	++++	取水、水浴
微凹地	ムラボ	ザンベジ川の旧河道	+++	農業（シタバ）、放牧、刺網漁
	リトゥンダ	ムラボ内部の波状に隆起した地形	++	農業（シタバ）、放牧、刺網漁
	ンジェレロ	ムラボ内部の波状に窪んだ地形	+++	農業（シタバ）、放牧、刺網漁
	リヤンダ	旧河道の後背湿地・河川敷	++	放牧
	リバラ	平坦な地形（ムラボやリヤンダを総称）	++	放牧、刺網漁
微高地	リズル	マウンド状の地形（粘土質）	—	集落、農業（リズル）、牛囲い設営、刺網漁、カタンバ漁
	ムケンガ・ワ・リズル	リズルの斜面	+	農業（ムケンガ・ワ・リズル、ンダミノ）
	リトンゴ	砂土が露出した地形	—	集落、農業（リトンゴ）、牛囲い設営、刺網漁
	リトゥンダ	旧河道の自然堤防状の地形（リズルやリトンゴが列状に並んだ地形）	—	集落、農業（リズル、リトンゴ）、牛囲い設営、放牧、刺網漁、カタンバ漁
	リブバ	洪水時に水が勢いよく流れる箇所（連なった微高地が途切れた場所、微高地のなかの窪地など）	+	農業、刺網漁

1) 冠水の程度は、それぞれの地形間の比高差を考慮して判定した。

+++++ > ++++ > +++ > ++ > + > —

2) 括弧内は耕地名称を示す（4.を参照）。

おして水を貯えている湖が点在し、これらはリサ (*lisa*) と呼ばれている。シムンドウエ村の西側にはいくつかの湖が存在するが、それらは刺網漁の漁場として、あるいは日帰り放牧における牛の水飲み場として利用されている。

湖ほどの規模をもたないが、ほぼ年間をとおして水を貯えている凹地を指す地形名称として、シワタタ (*siwatata*) とリティンディ (*litindi*) があげられる。シワタタは湖よりも水深が浅く面積も小さな凹地であり、乾季の終わりには籠漁が行われる。いっぽうリティンディも小規模な凹地であるが、アカバナ科のリティンディ [*Ludwigia stolonifera*, Onagraceae]<sup>15)</sup> やタデ科のリンブンブエ (*limbumbwe*) [*Polygonum senegalense*, Polygonaceae] などの草本類が水中に高密度で茂り、その草本類の層の上を人は歩くことができる。リティンディの水は概して濁りが少

なく、乾季における人の飲用水の取水場や水浴場として利用される。

## (2) ブロジの微凹地

乾季の初めまで水を貯え、徐々に水分が蒸発して湿地となるような低地をムラボ (*mulapo*) と呼ぶ。ムラボの多くはザンベジ川の旧河道であった可能性が高く、帯状の微凹地となっている。洪水期の開始時にザンベジ川を溢れてた水は、このムラボを伝って村の方まで流れてくる。ムラボの窪みの傾斜はなだらかで、水を貯えていない乾季には境界を判別することは難しい。しかし、流水時にはムラボは水路のようになり、その存在が明瞭となる。乾季にトウモロコシを作付けする耕地は、このムラボに造成される。ムラボの内部には波状に隆起した箇所と窪んだところがあり、前者をリトゥンダ (*litunda*)、後者をンジェレロ (*njelelo*) と区別している。また、ムラボのなかにシワタタが形成されている場合もある。このようにムラボでは、その内部を再区分して認知していることも多い。

帯状のムラボの周辺は、若干高まった平坦な地形となっている。これはリヤンダ (*liyanda*) と呼ばれ、ザンベジ川の旧河道沿いの後背湿地、あるいは河川敷であったと考えられる。ムラボやリヤンダをあわせた、やや平坦な地形をリバラ (*libala*) と呼び、放牧の適地となっている。

## (3) ブロジの微高地

以上は洪水期に必ず冠水する地形であるが、次に水に浸かりにくい地形について記述しておきたい。氾濫原のなかでもっとも高まったマウンド状の地形で、土壤中の粘土質の割合が大きい土地はリズル (*lizulu*) と呼ばれる。リズルは洪水期のピークでも冠水しにくいいため、耕地や集落の立地場所として利用され、人々にとってきわめて重要な土地となっている。リズルはシロアリ塚が風化したものや、あるいは旧河川の沖積作用によって形成されたと考えられる [Gluckman 1941: 6]。またリズルの斜面部はムケンガ・ワ・リズル (*mukenga wa lizulu*) と呼ばれ、耕地として利用されている。

粘土ではなく砂土が露出している地形は、形状や高低に関わらずリトンゴ (*litongo*) という。リトンゴは、平坦なリバラと比較して高く、ブロジのなかでは冠水しにくい地形であり、リズルと同じように雨季にトウモロコシを作付けする耕地として利用する。また雨季の開始時から洪水期の直前までの期間に、牛囲いを設けることもある。樹木が少ない氾濫原のなかで、一部のリトンゴには有刺樹のムカカニ (*mukakani*) [Acacia sieberana, Leguminosae]<sup>15)</sup> が生育する。

リズルやリトンゴなどの高台が列状に連なった地形はリトゥンダと呼ばれる。これは旧河道の自然堤防に由来する地形であると思われるが、ムラボのなかで隆起して列状に続く地形と同

15) 本稿に記載する植物の学名は、一部を除いて、筆者が作成した植物標本をザンビア大学生物学教室の P. Phiri 博士に同定していただいたものである。それ以外の植物の学名は、記載するうえで参照した文献を注釈に記すこととする。

16) O'sullivan [1993] による。

名である。また連なった微高地が途切れた箇所や、微高地の窪んだ場所は洪水時に水が勢いよく流れる場所となり、このような地形はリブバ (*libuba*) と呼ばれる。

### 3. 調査村の概況

#### 3.1 シムンドゥエ村

調査地のシムンドゥエ村は、モングの町から南西の方向へおよそ 13 キロメートルほどの地点にあり、バロツェ氾濫原のほぼ中央部であるプロジに位置する (図 2)。この村は 1939 年に、氾濫原の南端部 (現在のセナンガ県) にあるリタンビヤ (*Litanbiya*) 村から移住してきた人々によって創設された。現在の村長はこの村の創始者の息子にあたる。1999 年における人口は 56 人である。

冠水を避けるために、村はマウンド状の微高地につくられている。村のもっとも高い地点と低い地点との差はおよそ 3 メートルであるが、例年、洪水期には村の内部にも洪水は押し寄せてくる (写真 2, 3)。そのため、浸水しにくいように 20~30 センチメートル程度、家屋は土



写真 2 乾季のシムンドゥエ村



写真 3 洪水期のシムンドゥエ村

を盛った上に設けられている場合が多い。

洪水のピーク時である 3～4 月には、家屋の大半は浸水してしまう。そのため氾濫原の西側にある台地に設けられた分村に、一時的に避難する生活が続けられてきた。氾濫原の本村を「プロジのシムドゥエ村」(Simundwe wa bulozi)，分村を「ウッドランドのシムドゥエ村」(Simundwe wa kwa mushitu) と呼んでいる。1960 年代頃までは、洪水期には住民のほとんどが分村に移動したというが、1999 年に分村に移動した者は 10 人足らずであった。その他の内訳を示すと、氾濫原内の村の近くにある微高地に移動した者が 25 人、モングの町へ移動した者が 3 人、そして村に留まった者が 15 人であった。洪水期に村で生活続ける人々は、木柱を並べた上に雑草やトウモロコシの茎などを敷いて寝床を高くしたり、あるいはスチール製のベッドを購入して寝所の確保につとめている。

洪水期の居住先が分散するようになった理由として、人々は防犯の必要性をあげる。4 月頃はトウモロコシの収穫期でもあり、耕地に実っているトウモロコシが盗まれないように監視するため、村の近くから離れないというのである。しかし本村に留まった者が 15 人いるとはいえ、住民の 7 割以上の者は村を離れており、依然として氾濫原の生活は洪水にともなう季節的な移動と密接に関わっている。このような洪水にともなう住民の移動も、王の祭儀と同様にクォンボカと呼ばれている。

### 3.2 世帯の構成と世帯間の格差

シムドゥエ村は、村を創設した初代村長の兄弟の子孫らによって構成されており、居住者

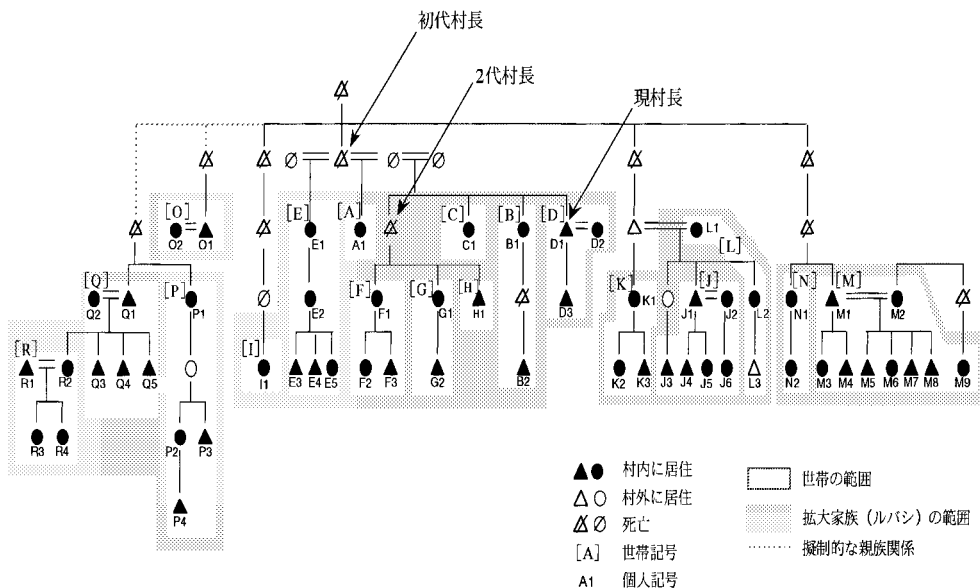


図 6 シムドゥエ村の住民構成 (1999 年)



のほとんどは親族・姻戚関係で結ばれている（図 6）。しかし実際には、世帯<sup>17)</sup> [O] や [P], [Q], [R] のように直接的な系譜関係にない者もみられる。

O1 の父親は家内奴隷（ムタンガ, *mutanga*）であったが、この制度が 1906 年に廃止されたのを契機に、O1 の父親と初代村長は義兄弟のような関係を結んだという。現在、双方の息子である O1 と D1 は、お互いを兄弟と同様の関係にあるとみなしている。<sup>18)</sup> また Q1 の父親は、かつてはシムンドゥエ村の北に位置するムラポの対岸域にあったマジェレマニ (Majelemani)

表 2 世帯構成と生業の概要 (1999 年)

世帯記号	世帯人数	世帯員の構成 <sup>1)</sup>						農業 耕地面積 (m <sup>2</sup> )	牧畜 牛所有頭数	漁 撈				備 考
		男 性			女 性					刺 網 漁	ヤ ス 漁	カ タ ン バ 漁	籠 漁	
		老 年	成 年	未 成 年	老 年	成 年	未 成 年							
A	1				1			3,230	1					村長、牛の管理ユニット <sup>4)</sup> の 責任者
B	2		1		1			9,181	28		○ <sup>2)</sup>			
C	1				1			7,111	26					
D	3	1 <sup>*3)</sup>	1		1			13,520	2	○				
E	5		1	1	1	1	1	5,368	2		○		○	
F	3			1		2		3,024	0				○	2000年 に帰村（世帯人数には 含んでいない） 牛の管理ユニットの責任者
G	2		1			1		1,679	0				○	
H	1		1					1,231	0	○	○			
I	1					1		1,726	0					
J	6	1	2		1	1	1	7,658	2	○		○	○	
K	3			1		1	1	5,353	0				○	牛の管理ユニットの責任者
L	2		1 <sup>*</sup>		1	1		2,853	5		○	○	○	
M	9		1 <sup>*</sup>	4		2	2	12,687	41	○	○	○	○	
N	2					2		2,358	0				○	
O	2	1			1			2,717	0					
P	4		1	1	1	1		4,337	4		○		○	牛の管理ユニットの責任者
Q	5	1 <sup>*</sup>	2		1		1	6,617	3	○	○			
R	4		1			1	2	316	0				○	
合計	56	4	12	8	10	14	8	90,966	114					

1) 老年=56歳以上，成年=16～55歳，未成年=15歳以下。

2) 漁撈欄における○は、1999年に各漁撈を営む者が該当する世帯にみられたことを示す（ただしヤス漁とカタンバ漁は2001年の例を示してある）。

3) \* は右の備考に説明を付したものを示す。

4) 牛の管理ユニットについては、5.2で述べる。

17) ロジ語でルバシ (*lubasi*) は拡大家族を表すが、世帯に該当する語彙はない。そのためここで用いる世帯とは分析概念であり、調査村における、居住、消費、土地保有、労働などを勘案して設定したものである。

18) ロジ語の親族名称では、平行イトコ・交叉イトコともに「キョウダイ」・「シマイ」の範疇にはいつている。

村に住んでいたが、1941年に植民地政府が実施した政策により、シムンドゥエ村に編入したという。<sup>19)</sup> Q1の父親と初代村長との関係が当時、いかなるものであったのかは明らかではないが、現在の村長であるD1を、Q1は「お父さん」(*ndate*)、Q1の娘婿であるR1は「おじいさん」(*kuku*)と、それぞれ親族名称で呼んでいる。このようにシムンドゥエ村では、実際は系譜上の繋がりをもたない者とも擬制的な親族関係を結び、村としてのひとつのまとまりを形成している。

しかし、表2に示したように世帯単位でみると、実際に営まれている生業の様相は一様ではなく、耕地の面積や所有する牛の頭数には世帯による格差が認められる。たとえば、世帯[R]は新しく移住してきたため、他の世帯と比較して耕地の面積はかなり小さい。また世帯[O]は、かつては多くの牛を保有していたというのが現在は皆無である。このような世帯は、民間医(O1)、あるいは鉄製品修理(R1)などの副職をもつ。

ロジ社会では、性別や年齢によって労働内容が規定される傾向が強いが[Gluckman 1941: Ch. 7]、そのことはとくに漁撈における漁法の選択に顕著に表れている。すなわち、各世帯ではその構成員の性別や年齢に応じて異なる漁法を採用しているため、その結果として世帯間には差異が生じている。このように、世帯間における生計経済上の変異の幅は小さくない。

とはいえ実際の消費をみると、収穫した作物、ミルク、魚などが世帯間でやり取りされたり、あるいは食事そのものが世帯を超えて提供されることが頻繁にある。また後述するように、この地方では耕地に牛囲いを設けて施肥するが、牛を所有する世帯のみが厩肥を独占するわけではなく、実際には牛を所有しない世帯にもある程度の厩肥がゆきわたるような配慮が認められる。本稿はシムンドゥエ村における生業の基本像を提示することを目的としており、同村で営まれる生業の典型的な把握を基礎にして記述を進めるが、必要に応じて世帯間の格差についても言及したい。

## 4. 氾濫原の農業

### 4.1 農業の概要

バロツェ氾濫原の中央域（プロジ）では、複数のタイプの耕地において農業が営まれている。シムンドゥエ村では、リズル、リトンゴ、シタパ(*sitapa*)、ンダミノ(*ndamino*)、ムコメナ(*mukomena*)の5種類の耕地が確認された。リズルとリトンゴは耕地名称と地形名称が同一である。いっぽうシタパとムコメナは造成された耕地を表す言葉であり、地形名称としては用いられない。各耕地は異なるタイプの地形に立地し、それぞれの土壌の水分状況にも相違がある。そのために各耕地の作付け時期も異なり、雨季のみではなく乾季にも作付けすることが可

19) 近年、世帯[Q]と[R]は、再びもとの場所(旧マジェレマニ村)に居住するようになった。

能となっている。雨季になってから作付けすることをリヤベレラ (*lyabelela*)、降雨を頼らずに乾季のうちに作付けすることをリシェタ (*lisheta*) という。

栽培されている作物の一覧は表3に示したとおりである。この地域では、かつてはモロコシが主作物であったが、現在ではトウモロコシに置き換わり、主食のブホベ (*buhobe*) と呼ばれる粉粥餅<sup>20)</sup> にはトウモロコシの粉が用いられる。トウモロコシに次いで重要とみられる作物はサツマイモとカボチャである。これらはトウモロコシの代用食として、あるいは間食として用いられる。基本的にすべての作物は自給のために栽培されており、氾濫原の農業は市場を指向するための生産を目的とはしていない。

農作業全般の主要な担い手は女性である。しかし牛耕は男性の仕事であり、また収穫は男女ともに従事する。かつては、分村が設けられているウッドランドで農耕に従事する者もあったが、1970年代以降に減少していった。以下に述べる内容をまとめ、生業暦(図7)および土地

表3 シムンドゥエ村で栽培されているおもな作物

和名	学名 <sup>1)</sup>	ロジ名	それぞれの耕地における栽培頻度 <sup>2)</sup>						利用部位
			リズル・リトンゴ	リズルの斜面	シタバ	ンダミノ	ムコメナ	村内	
禾本類	トウモロコシ	<i>Zea mays</i>	CC	CC	CC	CC			種子
	モロコシ	<i>Sorghum</i> sp.	C	C	C	C			茎
	モロコシ	<i>Sorghum</i> sp.		R	R	R			種子
	トウジンビエ	<i>Pennisetum</i> sp.				R			種子
イモ類	サツマイモ	<i>Ipomea batatas</i>				CC	CC		芋、葉
	キャッサバ	<i>Manihot utilissimus</i>				R	R		芋、葉
マメ類	ラッカセイ	<i>Arachis hypogea</i>		C	C	C			種子
	ササゲ	<i>Vigna unguiculatus</i>		C					種子
野菜類	カボチャ	<i>Cucurbita pepo</i>	C	C	C	C	R		果実、葉
	カボチャ	<i>Cucumis vulgaris</i>	C	C	C	C	R		果実
	トマト	<i>Lycopersicon esculentum</i>		C		C			果実
	ナタネ	<i>Brassica rapae</i>		C		C			葉
果実類	スイカ	<i>Citrullus vulgaris</i>	C	C	C	C	R		果実
	マンゴー	<i>Mangifera indica</i>						CC	果実
	グアバ	<i>Psidium guajava</i>						C	果実
	クワ	<i>Morus alba</i>						C	果実
	バナナ	<i>Musa sapientia</i>				R			果実
その他	サトウキビ	<i>Saccharum officinalis</i>				C		C	茎
	ヒョウタン	<i>Lagenaria</i> sp.			C				果実
	ヒョウタン	<i>Lagenaria</i> sp.			C				果実
	タバコ	<i>Nicotiana tabacum</i>				C			葉

1) 学名の同定にあたり Whitby [1973] を参照した。

2) 栽培頻度；CC：高い，C：普通，R：低い

20) デンプンの粉を熱湯で練り団子状に固めたもので、スワヒリ語におけるウガリにあたる。

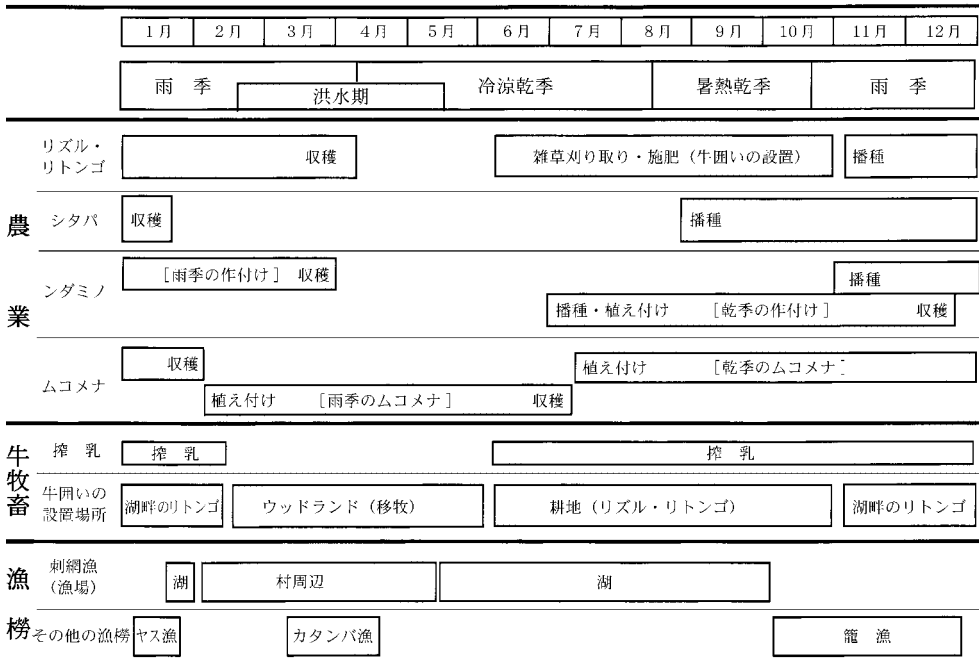


図 7 氾濫原の生業暦

利用の季節的变化（図 8）を掲げておく。

#### 4.2 リズルおよびリトンゴ

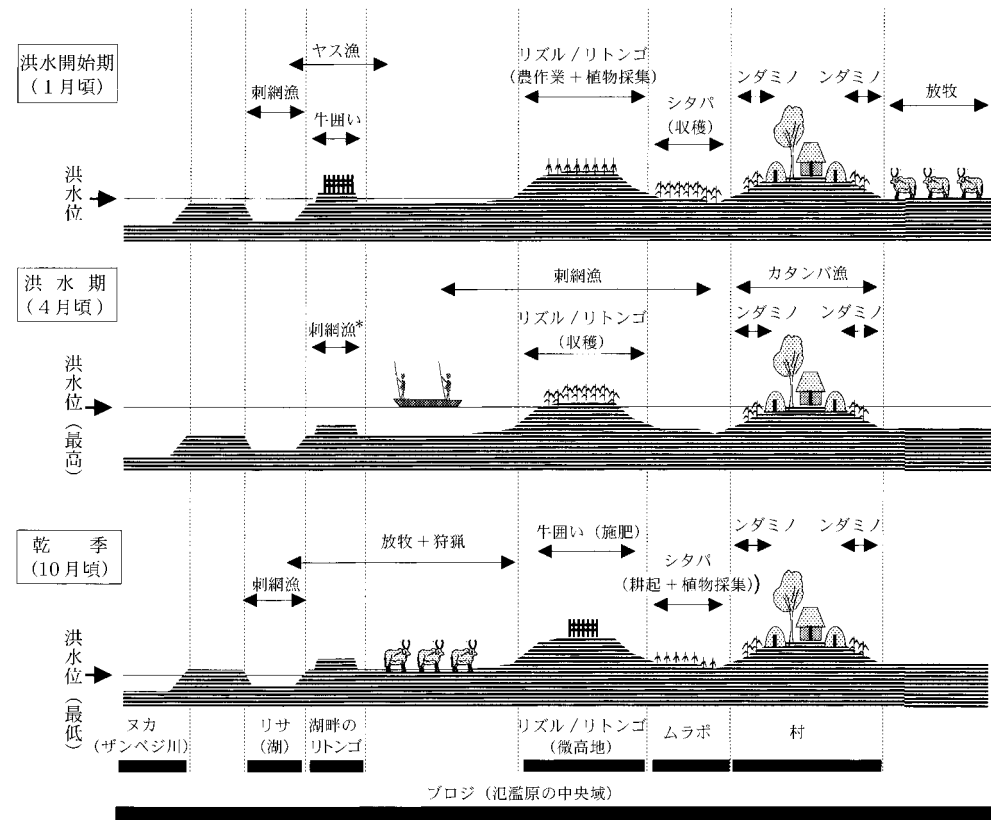
リズルとリトンゴは、ともに冠水しにくい微高地に造成された耕地である（写真 4）。表層土壌が粘土の場合はリズル、砂土の場合はリトンゴと区別するのが原則である。シムンドゥエ村の住民が耕作するそれぞれの面積は、リズルが約 7 万 2,000 平方メートル、リトンゴが約 5,300 平方メートルであり、それらを合わせた面積が全耕地に占める割合は 8 割を超える。どちらも農法には大差はないが、リズルのほうが農業に適しているといわれ、氾濫原の農業においてリズルがもっとも重要な耕地となっている。<sup>21)</sup> リズルのほとんどは毎年作付けされるが、リトンゴは作付けされない場合もある。

リズルやリトンゴで栽培する主作物はトウモロコシである。また若干のカボチャやスイカ、あるいはモロコシ（ンスエ、*nswe*）などを混作することもある（表 3）。ンスエは、茎が甘味を含んでおり、トウモロコシの収穫の合間に人々がしがむために栽培されている。

たいていの「リズル」<sup>22)</sup> には固有名がつけられている（図 9）。いずれも村長が村に居住する

21) その理由としては、リズルの土壌は粘土質であるため保肥性が高いこと、リトンゴと比較してリズルの比高が高い場合が多いことなどが考えられる。

22) 以降、耕地として利用するリズルとリトンゴを総称して、「リズル」と表記する。

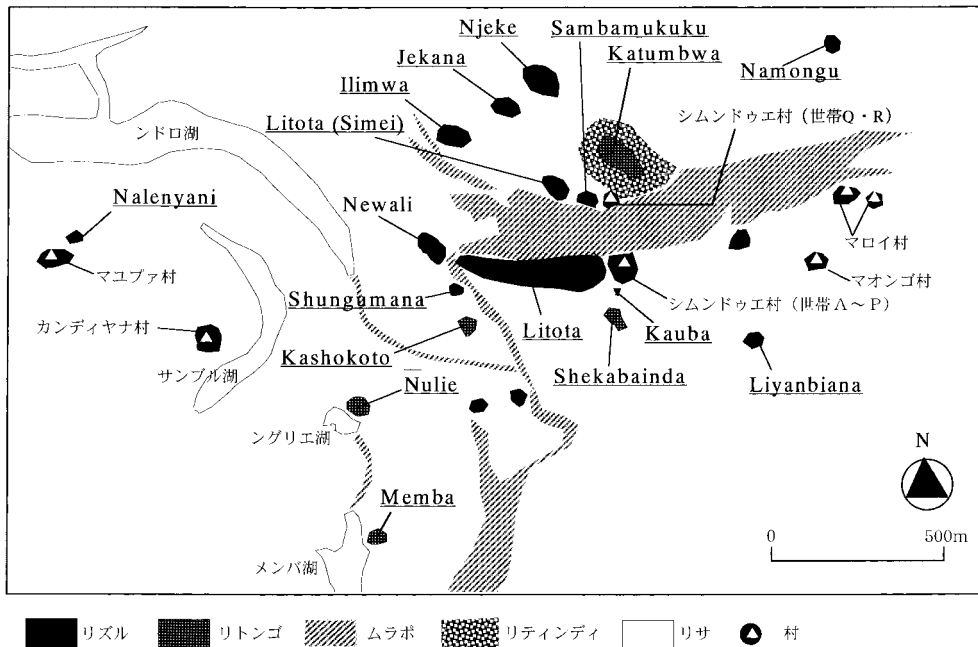


\* 現在は行われていない。

図 8 プロジにおける土地利用の季節的变化 (概念図)



写真 4 トウモロコシが生育するリズル



注：シムドゥエ村に関わりの深い地形・耕地のみを揭示してある。  
リズルとリトンゴの固有名には、下線を付してある。

図 9 シムドゥエ村周辺の地形および耕地の分布

者に配分するが、村から近村に移出した者にも使用が認められている場合もある。通常は「リズル」単位に配分されるが、規模の大きな「リズル」は区別して配分される。<sup>23)</sup>

「リズル」では、乾季の 7～9 月頃に雑草を刈り取り、それを何カ所かに集めて燃やした後、1～2 度ほど犁をかける。犁耕は 4 頭の去勢牛が鉄製の犁を牽引する方式で、この地方には 1930 年代以降に普及した [Beerling 1986: 8]。現在、この村では世帯 [M] が犁を所有しているが、多くの世帯では犁耕に用いる牛も所有していない。このような世帯では、犁と去勢牛を借り受けて犁耕を行う。犁耕を担う人手が足りない世帯では、日当を支払ったり、あるいは食事を提供したりして村の青年に依頼する例もみられる。乾季の耕起を終えた時点で、少量のカボチャやスイカなどを播種することがある。

トウモロコシを播種する時期は、雨季が始まる 11～12 月である (図 7)。播種には 2 つの方法がある。1 つはリティナ (*litina*) と呼ばれる穴を鋤で掘って播種する方法であり、もう 1 つは犁耕の後に条播きする方法である。リティナは直径が 30～35 センチの円形であり、深さは 10～15 センチほどである。播種後に、鋤を用いてリティナの上に土を被せる。また播種の時

23) たとえば、Litota という固有名が付与されているリズル (図 9) は、15 区画に区別されている。

期に必要な降雨がない場合には、シムンドゥエ村から南西へ4キロメートルほど離れたナマユラ (Namayula) 村に設けられた王墓<sup>24)</sup>で、雨乞いの儀礼 (クシェア・プラ, *kushea pula*) を執り行うこともあるという。

除草は、作物の生育に応じて2回ほど行う必要がある。最初はトウモロコシが膝の高さ程度になった頃に、まず鍬で雑草を根ごと掘り起こす。この動作をクタフラ (*kutahula*) という。そして何本かの雑草を掘り起こした後に、鍬の柄の先端部で根を叩き土を落としていく (クププタ, *kupuputa*)。さらに素手で根に付着した土を振るい落とし (クスクムナ, *kusukumuna*)、その雑草を耕地に放置しておく。1度目の除草では、これらの一連の作業を繰り返す。2度目はトウモロコシが肩の高さになった頃、手で雑草を引き抜く (ククムナ, *kukumuna*)。耕地に自生しているフウチョウソウ科のセシュングワ (*sesungwa*) [*Cleome gynandra*, Capparaceae] やヒユ科のテペ (*tepe*) [*Amaranthus thunburgil*, Amaranthaceae] など、野菜として食用になる植物は除草しないで耕地に残す。

トウモロコシの収穫は、洪水期の真只中の3~4月である。この頃、たいていの「リズル」は冠水している場合が多く (図8)、とくに洪水の規模が大きい場合には不作となる。収穫時には、腰まで水に浸かりながらトウモロコシの穂軸をもぎ取り、丸木舟に積んで村まで運ぶ。そして天日にさらして乾燥させた後、村の中に各世帯がもつ高床式の貯蔵庫 (スィシェテ, *sishete*) に収蔵する。収穫後の耕地に残されたトウモロコシの茎は、調理用の燃料として利用する。「リズル」では、数年に1度の割合で牛囲いを設け、牛の糞尿によって土壌の肥沃度の回復をはかっている。この施肥法については後述する。

「リズル」の斜面の部分 (ムケンガ・ワ・リズル) も耕地として利用される。この耕地は「リズル」全体のなかでは低位置にあり、土壌の水分含有率が高いため乾季の9月頃に作付けできる。この斜面耕地では、トウモロコシのほかにラッカセイ、ササゲ、カボチャ、トマト、スイカなどの多様な作物が栽培される。

#### 4.3 「リズル」における牛糞による施肥法

日帰り放牧から戻った夕刻から翌朝までのあいだ、牛は柵をめぐらした囲いの中で過ごす (写真5)。<sup>25)</sup> このような牛囲いをムラカ (*mulaka*) と呼ぶ。この地方では、耕地に牛囲いを設け、夜間に牛が排泄する糞尿によって施肥する方法が広く普及している。1999年にシムンドゥエ村では、このような施肥法が「リズル」で行われていた。近村ではンダミノ (4.5に詳述する) に牛囲いを設けている例もあり、またウッドランドでは焼畑耕地に牛囲いが設置されていた。このように牛囲いを設置して施肥することをクトゥリサ (*kutulisa*) といい、牛がウッドランドでの移牧から氾濫原に帰還する6月頃から、雨季が始まり播種のシーズンとなる11月頃まで

24) ナマユラ村には、8代王ユービヤ (Yubiya) が埋葬されている。

25) 牛牧畜については次章で触れる。



写真 5 リズルに設けられた牛囲い

の期間に行われる（図 7、図 8）。

牛囲いを設置するための最初の作業は、耕地の整地である。鋤で雑草を刈り取り、何カ所かに集めて燃やす。そして木柱を立てるための穴を掘る。牛囲いに用いる木柱はすべてウッドランドから調達しなければならないが、木柱が不足すると囲い内の牛が高密度になる場合もある。穴掘りには、スイペロ (*sipelo*) と呼ばれる全長が約 80 センチメートルの掘り棒を使用する。この掘り棒は、以前は木製であったというが、現在は古くなった斧の刃を鉄パイプの廃材に取り付けて用いている。掘り終えた穴に木柱を立て、木柱の周囲にかつてならば横木を、現在では有刺鉄線を張りめぐらして作業は完了する。

牛囲いの規模は牛の頭数に比例して大きくなる。たとえば、成牛 40 頭くらいの場合、10 メートル四方（100 平方メートル）の大きさが平均的なサイズである。1 筆の耕地は牛囲いの面積よりも広いため、耕地全体に牛の糞尿がゆきわたるよう、隣接する未施肥地に牛囲いを順次、移動させる方法をとる。

何日ごとに牛囲いを移動させるのかは、耕地の土壌のタイプや牛囲い内の牛の頭数とも関係する。シムンドゥエ村ではすべて 3 日ごとに移動させていたが、他村では最長で 5 日ごと、最短で 2 日ごとに移動させている例もあった。リトンゴのように砂土が卓越する耕地では移動の間隔を長めにし、また囲い内の牛の頭数の密度が高ければ移動させる間隔を短くしている。

実際に 1 筆のリズルで、どのように牛囲いを移動させたのかを示したのが図 10 である。23 区画を 3 日ごとに移動し、69 日間かけて 1 筆分の施肥が終了している。耕地全体に牛糞がゆきわたるように、牛囲いの設置場所を移動させていることがわかる。1 筆分の施肥が終了すると、別の耕地に牛囲いを移転し、同様の作業を繰り返す。このようにして、1 シーズンに 3～4 カ所の耕地に牛の糞尿が施されることとなる。

排泄されて間もない牛糞をブロコ (*buloko*)、ある程度乾燥した牛糞をリス (*lisu*) と呼ぶ。そ



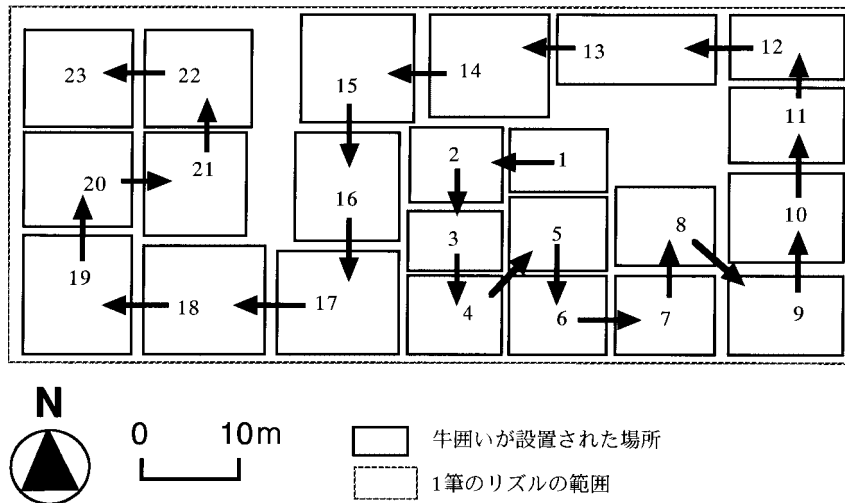


図 10 1 筆のリズルにおける牛囲い移動の例

して牛糞が土壌と混ざるとムステロ (*musutelo*) と呼び、肥料としての効果を発揮するようになるという。2 年に 1 度くらいの頻度で、このような施肥を行うのが理想的であるといわれている。また、耕地内の乾燥して固くなった土塊を牛が踏み砕くため、この施肥法は蹄耕の要素も合わせもっていると、人々は認識している。

#### 4.4 シタパ

プロジの微凹地であるムラボを開墾した耕地がシタパである (図 8)。村に居住する者は、自由に場所を選択して村長に報告し、シタパを開墾することができる。1998 年にシムンドゥエ村では、15 世帯がシタパの作付けをし、その総面積は約 1 万 1,000 平方メートルであった。この村の周辺には複数のムラボが存在するが、村や耕作地とする「リズル」の近くにあるムラボに、シタパを造成する傾向がある。シタパは毎年必ず冠水する耕地であり、洪水が引いたあとの乾季に作付けする点に大きな特徴がある<sup>26)</sup> (図 7)。通常、同じ場所を 2 年ほど耕作した後には放棄し、また別の場所を開墾する。

ムラボに自生する雑草類は 8 月頃には枯れて乾燥する。まず、この枯れ草に火を入れて焼き払ったあとに、雑草の根の部分の鋤で掘り起こし反転させてゆく。根の周囲に付着した土塊をリクウェッセ (*likwese*)<sup>27)</sup> と呼ぶ。このような荒起こしをした後に、あらためて犁をかける場

26) ハーランとパスカルは、洪水を利用して行う農業 (flood-water farming) を、洪水そのものを農業に利用する flood cultivation と、洪水が引いた後に作付けする flood-recession cultivation の 2 つに分類しているが [Harlan and Pasquereau 1969]、シタパの耕作は flood-recession cultivation に該当するといえよう。

27) 家屋の戸口の部分を盛り上げるのに、リクウェッセを用いることもある。

合もある。土壌中の水分が減少した 8～9 月にトウモロコシを播種する。このとき少量のカボチャを間植することもある。トウモロコシの収穫時期は 12～1 月頃である。ムラポでは 1 月には浸水が始まり、それまでに成熟していないトウモロコシは放棄されることになる。水位の低下が遅い年には播種が遅れて 10 月頃となるため、翌年の洪水期には完熟していないトウモロコシが浸水し収量が低くなる。

ムラポの中でも、隆起したリトゥンダと凹地のンジェレロの比高差はわずかであるが、土壌中の水分量には明瞭な違いがある。たとえば、乾季の終わりに（1999 年 10 月 15 日）計測した 1 筆のシタパでは、リトゥンダの水分含有率の平均は 35.0 パーセント (N=3) であったのに対し、ンジェレロの平均は 57.4 パーセント (N=3) であった。<sup>28)</sup>このような場合、播種用の種子に異なる処理を施して対応する。すなわちリトゥンダには、水を張った容器にトウモロコシの種子を 1～2 晩のあいだ浸したあとで播種し、ンジェレロには水に浸さない通常の種子を用いるのである。種子を水に浸すことをクコンベ (*kukombe*) といい、これにより発芽が促進されるという。鍬でリティナ（植穴）を掘り、そしてトウモロコシの種子を 4、5 粒ずつ播く。それぞれのリティナの間隔は 40～45 センチメートルである。また、犁耕後のラインに沿って条播することもある。その後、2 回ほど除草する。

シタパでは、発芽したてのトウモロコシが鳥害にあうことが多いため、鳥除けの案山子を立てることがある。案山子には 2 種類ある。1 つはリスンサ (*lisunsa*) と呼ばれる人形状の、いわゆる案山子である。もう 1 つは 2 本の竿に紐を結びつけ、ぼろ布や細く切ったビニールを吊したもので、これはンデンベラ (*ndembela*) と呼ばれる。

また 11 月頃、シタパで育成し始めたトウモロコシを、後述するンダミノなどに移植することがある。ンダミノはシタパと比較して高位にあるため、移植したトウモロコシが浸水による被害を受けにくくなる。このような移植をクスガ (*kusuga*)、あるいはクシュガ (*kushuga*) と呼び、とくに降雨があった直後に行われることが多い。このとき、トウモロコシの葉の先端部を切り取ってから移植する。これをクプマ (*kupuma*) と呼び、移植後の成育が良くなると考えられている。

#### 4.5 ンダミノ

村のあるマウンドの斜面、すなわち村の周囲に設けられた耕地がンダミノである（図 8）。ンダミノは村の住民から目の届く近い位置にあるため、作物が盗難にあう心配もなく、また収穫物を村まで運搬する手間もかからない。「リズル」と同様に、村長が村に居住している個人にンダミノを配分し、それぞれの区画には明確な境界がある。シムンドウエ村では、15 世帯が配分を受けており、その総面積は約 1,900 平方メートルである。

28) 土壌を採集した直後および土壌を乾燥させた後に、それぞれ重量を計測しその差から土壌中の水分含有率を求めた。以下においても同様の方法で計測した。

ンダミノには多様な種類の作物が栽培されており、キッチンガーデンとしての機能をもっている。トウモロコシをはじめとして、カボチャ、スイカ、サツマイモ、サトウキビのほか、一部ではラッカセイ、タバコ、キャッサバ、ナタネなどもわずかながら栽培されている（表 3）。またンダミノには、葉が食用となるフウチョウソウ科のセシングワや、薬草であるタデ科のムタタバリム (*mutatabalimu*) [*Oxygonum sinuatum*, Polygonaceae] などの野生植物が生育していることもある。これらは氾濫原のなかに自生しているが、ンダミノに播種されることもある。この場合には、散播（クハサ, *kuhasa*）の方法がとられる。

ンダミノはマウンドの斜面にあり、下部にゆくほど土壤中の水分量は多くなる。1999 年 9 月に、1 筆のンダミノにおける土壌の水分含有率を調べたところ、斜面の上部では 6~9 パーセント (N=6)、下部では 20~32 パーセント (N=6) であった。下部では降雨がなくても作物の成育が可能であり、乾季のうちに作付けすることができる（図 7）。とくにカボチャなどは、洪水が引いた直後（6 月頃）に播種され、収穫は 12 月頃となる。サツマイモを栽培する場合には、後述するムコメナを造成する。また乾季にナタネなどの葉野菜を作付けする場合には、隣接するムラボから水を汲んできて灌水し、ニワトリやアヒルの糞を施肥することもある。

このようにンダミノでは、水分状況の差異に応じて時期をずらして栽培することができる。また洪水期には冠水するため、その肥料効果のゆえに化学肥料などを使用することなしに地力が維持されている。

#### 4.6 ムコメナ

ムコメナは盛り土をして造成する方形マウンドの耕地であり（写真 6）、その造成地は雨季と乾季で異なっている。1999 年における雨季のムコメナは、洪水を避けて、トウモロコシが栽培されていない他村のリズルに造成された。乾季のムコメナは、シムンドゥエ村の近くのリブバなどに造成された。微高地の低位部であるリブバは、砂土の多い土壌であるが適度な水分



写真 6 乾季におけるムコメナの造成

を含んでいる。また乾季のムコメナをンダミノに作る世帯もあった。毎年違う場所をムコメナの造成地とするが、1～2 年経過すれば同じ場所に造成できるという。ムコメナで栽培するのは主としてサツマイモである。雨季のムコメナは洪水期の始まる 2 月頃に作り、収穫は 6 月頃になる。乾季のムコメナは洪水が引いた 6 月頃に造成し、12～1 月に収穫する（図 7）。またムコメナで若干のカボチャやキャッサバを作付けすることもあるが、頻度は低い（表 3）。

ムコメナでは、まず雑草類を鋤で刈り取って地面に敷き詰め、その上に土を被せてゆく。この雑草が肥料となっているという。そして 50～80 センチメートル程度の長さに切ったサツマイモの茎（ミロ、*milo*）を並べ、再び土を被せる。雨季、乾季ともに同様の作り方である。表層を覆う土を周りから掘り集める。結果としてムコメナの周囲は、幅が約 50 センチメートル、深さが約 40 センチメートルの堀になる。この堀はリングンジャ（*lingunja*）と呼ばれ、洪水期には排水溝としての機能をもつ。またムコメナでは、畝状に盛り上げるため土が柔らかくなり、サツマイモの根が張りやすくなると人々は説明する。

上述のような、サツマイモの茎を並べる方法をクンベラ・ミロ（*kuyumbela milo*）と呼ぶが、そのほかにクスガ・ミロ（*kusuga milo*）という方法もある。これは 30～50 センチメートルに切った茎を 3～4 本ずつ立てて植え付けていく方法であり、1 つ 1 つのイモが大きく成長すると考えられている。サツマイモを収穫する際には茎の部分もあわせて引き抜き、茎は次期に造成するムコメナの植付けに用いる。

#### 4.7 農業生産の不安定性

本節では、耕地の種類ごとに村全体と世帯平均の耕地面積を提示し、農業生産の概況について検討しておきたい。表 4 が示すように、「リズル」は耕地全体のうち 85 パーセント以上の面積（約 78,000 平方メートル）を占めており、氾濫原における農業の中核となっている。この耕地では、牛囲いによる施肥法が確立しており、土地に対する使用権も明確に定められ、耕地

表 4 耕地ごとの面積（単位：平方メートル）

耕地の種類		村全体	世帯あたりの平均 <sup>1)</sup>	世帯 [M]	世帯 [L]
「リズル」		77,754	4,320	10,530	1,920
シタパ		10,563	587	2,157	720
ンダミノ		1,924	107	0	156
ムコメナ	雨季	473	26	0	— <sup>2)</sup>
	乾季 <sup>3)</sup>	252 (450)	14 (25)	0 (1) <sup>4)</sup>	57
合 計		90,966	5,054	12,687	2,853

1) 小数点第 1 位を四捨五入した。

2) 作付けはされたが、面積は不明。

3) 括弧内は、ンダミノに造成したムコメナの面積を示す。

4) このムコメナは、他の世帯が保有するンダミノに造成された。

の管理が行き届いている。世帯平均の「リズル」の面積（約 4,000 平方メートル）をひとつの目安とすると、シムンドゥエ村の 18 世帯のうち 4,000 平方メートル以上の広い面積を保有するのは 7 世帯である。残りの 11 世帯は 4,000 平方メートル未満であり、うち 5 世帯は 2,000 平方メートル未満しか保有していない（図 11）。

「リズル」に次いで面積が広い耕地はシタパであり、全耕地面積の約 12 パーセントを占める。ムラボを開墾するシタパは、労力さえ惜しまなければ各世帯が自由に広げることが可能であり、施肥の必要もない。またシタパでは雨季の開始時期に収穫できるため、年間の食糧を安定的に確保するうえで重要である。面積はやや小さいがンダミノやムコメナでも、異なる時期に収穫が可能であるため、シタパと同様に食糧供給の安定性を増す機能が認められる。

ここでは、広い「リズル」をもつ世帯 [M] と、2,000 平方メートル未満の「リズル」しかもたない世帯 [L] の例をとりあげ（表 4）、氾濫原における農業の不安定な側面について言及しておきたい。世帯 [M] は、リトタ (Litota) やンジェケ (Njeke) の一角やシェカバインダ (Shekabainda)、ナレニヤニ (Nalenyani) などの「リズル」（図 9）を保有し、これらを合計した面積は 10,000 平方メートルを超えている。この世帯は多数の牛を所有しており、牛囲いによる「リズル」の施肥も、2 年に 1 度の間隔で入念にしている、他の村人からも良い耕地をもっていると評価されている。いっぽう世帯 [L] は、1,920 平方メートルの「リズル」をリトタ (Litota) の一角に保有しているに過ぎない。この世帯が所有する牛の頭数も 5 頭とそれほど多くはなく、「リズル」の施肥の頻度は 10 年に 1 度程度である。

しかし、洪水の規模が例年よりも大きかった 1999 年の 9 月に、「リズル」で収穫したトウモロコシの保有状況を世帯ごとに調査したところ、世帯 [L] ではトウモロコシの残量が若干

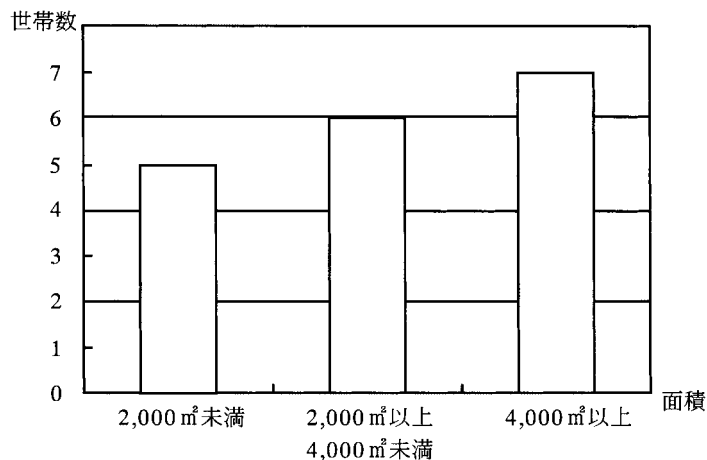


図 11 「リズル」の保有面積による世帯の分類

あったが、世帯 [M] ではすでに底をついていた。2 つの世帯は構成員の数も異なり、他のさまざまな要因も関与するため一概にはいえないが、<sup>29)</sup> 氾濫原の農業生産は洪水の規模といった自然条件によって大きな影響を受けやすく、不安定な側面をもつことも指摘しておかなければならない。

このような大洪水は数年に 1 度の割合で起こるが (図 5)、人々の食生活は必ずしも悲惨な事態におちいるわけではない。「リズル」の保有面積が小さい世帯では、[L] 以外のすべての世帯でトウモロコシを消費し尽くしていた。しかし、世帯 [F] や [G] はウッドランドの分村に長いあいだ居住して日常的に酒の醸造<sup>30)</sup> と販売を営み、あるいは世帯 [H] は漁撈に専念して現金収入を得ていた。また、世帯 [M] では後述するように、恵まれた漁獲との交換で不足分のトウモロコシを補った。このように、不安定な側面をもつ農業を補完するために、農業以外のさまざまな生業が営まれている。

## 5. 氾濫原の牛牧畜

### 5.1 牛牧畜の概要

豊富な牧草と水場を有し、また眠り病を媒介するツェツェバエが分布しないバロツェ氾濫原では、牛の飼養はかなり盛んである。かつては、王が所有する牛の世話を委託された村々が存在し、シムンドゥエ村の近くではマユプア (Mayupwa) 村 (図 9) がそのような村であった。

1999 年の時点でシムンドゥエ村の住民が所有する牛の総頭数は 114 頭である (表 2)。これに村外から預かっている 47 頭<sup>31)</sup> をあわせると計 161 頭になり、住民 1 人あたり約 3 頭の牛を飼養していることになる。すでに述べたとおり、氾濫原における持続的な農業を支えるうえで牛がもつ意味は大きい。また婚資としての重要性はいうにおよばず、ほかにも牛は多くの価値や機能を担っている。

牛のミルク (マビシ, *mabisi*) は、村人の貴重な栄養源であり、現金収入源の 1 つでもある。ミルクにはそのまま飲用とする生乳 (ムズィリリ, *muzilili*) と、生乳を 1~2 日おいてできる酸乳 (マビシ・アテミレ, *mabisi atemile*) の 2 種類がある。生乳のまま飲用とする場合よりも、酸乳を主食の粉粥餅 (ブホベ) に混ぜて利用することが多く、魚と並んで彼らが好む副食の 1 つとなっている。酸乳はモングの町などに運べば容易に換金できる。

29) リチャーズらが実施した栄養調査 [Richards and Widdowson 1937] に従い、14 歳以上の男には 1.0、14 歳以上の女には 0.8、6 歳から 14 歳の子供には 0.7、それ以下の子供には 0.4 の値を与え、乳児は除いて、実質消費成員数を算出すると、世帯 [L] は 1.6、世帯 [M] は 6.1 となる。また「リズル」の保有面積を実質消費成員数で除した値は、世帯 [L] が 1,200 平方メートル、世帯 [M] が 1,726 平方メートルである。

30) 自家醸造される酒には、トウモロコシなどの穀物を原材料とする濁酒と、砂糖とイーストを主材料とする蒸留酒などがある。後者のほうが酒造の頻度は高い。

31) 氾濫原の外部に居住する親類や知人、そして氾濫原内の近村の住民が所有する牛が預けられている。

日常の食用のために村で牛を屠殺することは稀であるが、事故死したり病気のため屠殺した牛の肉は人々の食卓にのぼることとなる。解体してすぐに料理して食べることもあるが、肉片を天日で乾燥して保存することが多い。また当座の現金が必要な場合には、村々を巡回する牛の仲買人をとおして、町にある食肉会社などに牛を売却することもできる。その他、犁耕には去勢牛が用いられているし、乾季の重要な輸送手段である櫓（スイレイ、*silei*）<sup>32)</sup>を牽引するのも去勢牛である。また、耕地以外に落ちている牛糞は誰が拾い集めてもよく、調理用の燃料や壁塗りの材料として使用する。

## 5.2 牛の管理ユニット

シムンドゥエ村では、複数の世帯が所有している牛をまとめて、合計3つの牛群を編成して牛を管理している。この牛群とその世話をする人々を以下では、管理ユニットと呼ぶ。各世帯が所有する牛の頭数と管理ユニットの関係を示したのが図12である。

それぞれの管理ユニットは、1人の責任者が管理・統括している。施肥を目的として牛囲いを移動する作業も、この責任者が行うことが多い。管理ユニットの責任者を意味する現地語はとくに聞かれなかったが、<sup>33)</sup>シムンドゥエ村では、世帯主に相当する40歳代以上の男性がこの

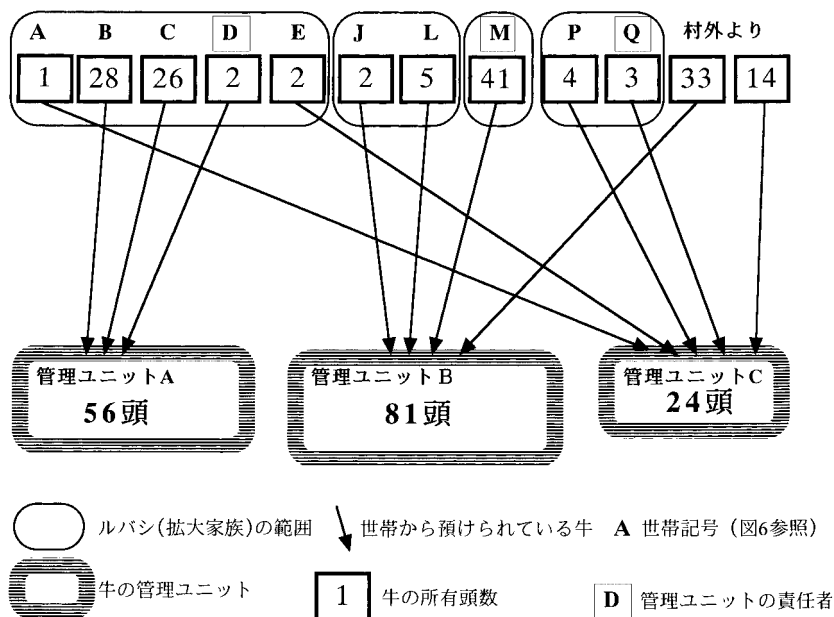


図12 牛の管理ユニットの編成

32) 櫓には、V字型の自然木を利用したものと、老朽化した丸木舟の底部を利用したものがある。

33) Beerling [1986] は、管理ユニットの責任者を表す現地語として「ムガ・ムラカ」(*mung'a mulaka*)をあげている。

役についている。各管理ユニットでは、10～20 歳代の青少年が牧童に任命され、日帰り放牧や搾乳などに従事している。牧童はムリサーナ (*mulisana*)、あるいはイムトンゴ (*imutongo*) と呼ばれている。

〔管理ユニット A〕の責任者は、村長の D1 である（図 6，図 12）。このユニットに預けられている牛のほとんどは、D1 の姉にあたる B1 および C1 が所有している。そのために B1 や C1 から世帯〔D〕に対して、しばしば返礼として夕食が提供されていた。1999 年の一時期、この〔管理ユニット A〕では K3 の少年が牧童として D1 の手伝いをしていたが、その期間、K3 は D1 の世帯と一緒に夕食をとっていた。また M1 が管理する〔管理ユニット B〕では、P3 が M1 の手伝いをしていたが、同じ年に P3 の祖母にあたる P1 が耕作するリズルに施肥のための牛囲いが設けられた。このように牛の世話は、まったくの無報酬でなされているわけではなく、食事の提供や施肥の便宜をはかるなどの直接的な見返りがある場合が多い。

### 5.3 搾乳と牛乳の分配

搾乳の対象となるのは出産後 3 カ月ほど経過した雌牛であり、それまでは仔牛がミルクを独占できる。牛の搾乳をクハマ (*kuhama*) といい、1 日に 1 回、牧童が牛囲いの中で搾乳する。その手順は以下のとおりである。

牛囲いから少し離れた場所に立てられた杭（スイトリ、*sitoli*）に、仔牛を 1 頭ずつ繋いでおく。ロープを解かれた仔牛は、牛囲いの中にいる母牛のもとへ走り、ミルクを吸い始める。そのあいだに牧童は母牛の後ろ脚をロープで縛り、仔牛に少しミルクを飲ませたあとで、仔牛を叩いて母牛から隔離し搾乳を開始する。ミルクは、高さ約 40 センチメートル、容量が 3～4 リットルの木製の容器（スイクンドウ、*sikundu*）に入れる。いったん搾乳を終えてから、もう 1 度仔牛にミルクを吸わせて乳量を観察し、再び搾乳を試みることもある。また搾乳後、牧童が乳首に口をつけてミルクを吸飲することもある。

表 5 は、D1 が管理する〔管理ユニット A〕で 1999 年 11 月 22 日に搾乳されたミルクの分

表 5 〔管理ユニット A〕におけるミルクの分配例（1999 年 11 月 22 日）

個人記号	性別	分配量 (リットル)	備 考
B1	F	5	牛所有者（28 頭）
C1	F	5	牛所有者（26 頭）
D1	M	5	管理ユニット責任者 牛所有者（2 頭）
D3	M	2.5	牧童
E3	M	2.5	牧童
F3	M	0.5	
G2	M	2.5	牧童
計		23	

注：個人記号は図 6 を参照



配量を示している。このユニットに多数の牛を預けている B1 と C1、および管理者 D1 が各 5 リットルのミルクの分配を受け、次いで牛の世話をしていた D3、E3、G2 の 3 名の牧童が各 2.5 リットルずつ得ている。そして当時 5 歳の F3 も、0.5 リットル程度のミルクの分配を受けた。

#### 5.4 牛囲いの設置場所と放牧地の季節的变化

〔管理ユニット B〕を例として、年間をとおして 1 つの牛囲いがどのように移転したかを示したのが図 13 である。前章に記したとおり、6 月から 11 月までの期間、牛囲いは施肥を目的として耕地に設置される。シムンドゥエ村の場合、雨季作が始まる 11 月には、すべての牛囲いを西方のングリエ湖畔のリトンゴに移し、しばらくしてングリエ湖畔が冠水し始めると、まだ洪水が達していないメンバ湖畔のリトンゴに牛囲いを移転させる。リトンゴは周囲よりも比高が高いために冠水の被害が少なく、かつ砂土であるために泥でぬかるむ程度が小さいからである。また、これらのリトンゴの近くには耕作地のリズルがなく、村からも離れているため、作物が牛の食害にあう心配も少ない。このような湖畔のリトンゴは耕作の対象とはならず、もっぱら牛囲いの設置場所として利用されている。1995 年頃からは、湖畔のリトンゴに

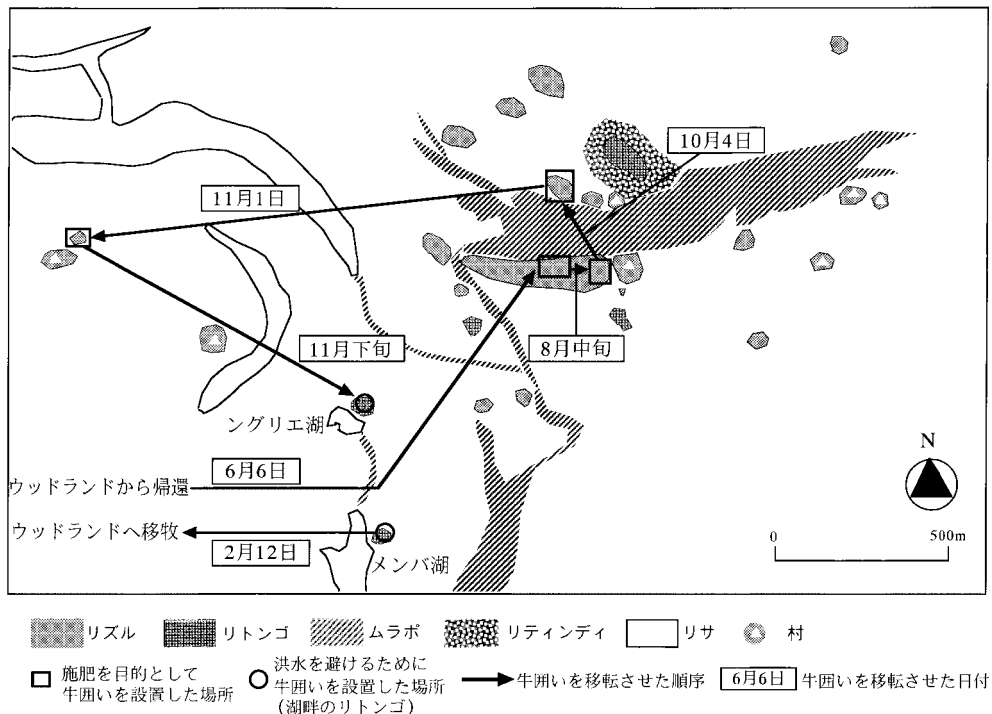


図 13 1999 年における牛囲いの移転の例 ([管理ユニット B])

牛囲いが設けられているあいだ、草葺きの小屋を建てて牧童らが宿泊し牛の夜警にあたるようになった。<sup>34)</sup>

牛囲いが耕地に設置されている期間の放牧地は、村から 1~2 キロメートルほど西方の平坦な土地が選ばれる。洪水が引いて間もない頃のムラボには、イネ科のトボイ (*toboi*) [*Echinochloa stagnia*, Gramineae]<sup>35)</sup> やムタカ (*mutaka*) [*Panicum* sp., Gramineae] など牛が好む牧草が生育している。<sup>36)</sup> 11~12 月頃は、氾濫原の牧草が減少する時期である。そのため、ザンベジ川の本流近くで牧草が豊かに残っている場所が放牧地となる。いっぽう、ザンベジ川が増水し始め洪水域が広がってくると、洪水の到達が遅いシムンドウエ村の南東部を放牧地として利用する。この時期には、牛群が放牧地と牛囲いのあいだを往復するときに、水の中を移動する日が続く。牧童は丸木舟を操りながら、あるいは泳ぎながら牛群を誘導する。こうまでして牛群を氾濫原内に引き留めておくのは、ひとえに搾乳のためである。

## 5.5 牛の移牧

バロツェ氾濫原では牛の移牧が行われている。洪水が始まり地表が水面下に沈む 2 月頃になると、牛群は氾濫原からウッドランドに移動し、洪水が引く 6 月頃に再び氾濫原に戻ってくる(図 7)。牛群が氾濫原の外部へ移動することを、「牛のクオンボカ」(*kuomboka sa likomu*)、あるいは単にクオンボカと呼び、王の季節的移動にともなう祭儀と同じ語で表現される。

シムンドウエ村の牛の移牧先は、その分村がある氾濫原西側のウッドランドである。村ごとに牛の移牧先は異なるが、シムンドウエ村の近隣の村々の移牧先は、ほぼ同じ方角にあるため、移牧を共同で実施することが多い。氾濫原では、ザンベジ川の本流に近い放牧地から浸水するため、本流の近くに位置する村が移牧を実施する日取りをまず決め、他の村々がそれに参加するかどうかを決定する。そのために移牧を共にする村々の構成は、毎年固定しているわけではない。シムンドウエ村と同じ日に移牧を行った村の数は、1999 年が 6 ヶ村であったのに対し、2001 年は 4 ヶ村であった。移牧の日取りは、洪水の到来が早かった 1999 年と 2001 年にはそれぞれ 2 月 12 日および 2 月 10 日、洪水の到来が遅かった 2000 年には 3 月 3 日であった。いっぽう牛が氾濫原に帰還したのは 1999 年が 6 月 6 日、2000 年が 6 月 5 日であった。

ウッドランドにむけて牛群が発券するのは、午前 7 時頃である。1 人の牧童がナマルワ (*namalwa*) と呼ばれる楽器<sup>37)</sup> を鳴らして牛群を先導し、他の牧童は群れの後ろから牛を追いつ

34) この夜警は、東アフリカに顕著なレイディングを想定したものではなく、牛を市場で売却することを目的とした牛泥棒に対処するためのものである。また同じ頃より、施肥のために牛囲いを設けた「リズル」でも、夜警のための小屋を建てるが多くなってきた。

35) Trapnell and Clothier [1937] による。

36) とくにトボイは茎が甘味を含んでおり、恰好の牧草となるとともに人がその味覚を楽しむこともある。

37) 牛の鳴き声に似た音をだす太鼓に似た形状の楽器。上部に張ってある皮の部分から下方にむけて内部に棒が取り付けられており、この棒を擦ることによって皮が振動し音が鳴る仕組みとなっている。



写真 7 ウッドランドにむけてザンベジ川を渡る牛群

てる。また残りの村人は丸木舟に分乗し、時には航路を選ぶために牛群から離れることもあるが、できるだけ牛群を取り囲みながら進む。移動の途中、ザンベジ川の本流や支流、あるいは水かさが増した凹地では、牛は泳いで渡らなければならない（写真 7）。このような場所では、体力を消耗した牛が溺死することもあり、また多くの人々は牛がワニの被害に遭うことも恐れている。<sup>38)</sup> 牛群が川を渡る時には、ナマルワを持つ牧童が丸木舟に乗り誘導する。そのほかの丸木舟は、牛群が水流に流されないよう下流側に列状に位置して、牛群を注意深く見守りながら進む。移牧の過程のなかでもっとも緊迫し、丸木舟を操る高度な技術が要求される場面もある。このようにして、昼前には目的地のウッドランドに到着する。

ロジ語には「*kutapa silozi*」という表現がある。これは「ロジ風に（上手に）泳ぐこと」を意味し、<sup>39)</sup> この言回しは牛が泳ぐ場合にも用いられる。冠水した氾濫原やザンベジ川を牛が泳ぎ渡れるよう、上手に牛を誘導し、あるいは介助する技術をもつことは「ロジらしさ」と結びついている。

## 5.6 移牧の新たな展開

シムンドゥエ村の周辺では 1960 年代頃まで、各村の男性が移牧先においても氾濫原と同じように牛群の管理をしていたという。しかしシムンドゥエ村では、1982 年から分村にほど近いサチロンデラ (*Sacilondela*) 村に牛群を預託するようになった。この村にはブンダという民族集団の人々が居住している。

19 世紀以降、西方のアンゴラから移住してきたブンダは、おもにウッドランドで焼畑耕作

38) 牛が無事に移動することを祈念するために、例年、移牧の途上に王墓があるナマユラ村に立ち寄ることになっている。また 2001 年の移牧では呪医が同行し、所々で牛の安全やワニ除けを祈願した。

39) 丸木舟を操ることと並んで、泳ぐことは、氾濫原で生活するうえで各自が身につけるべき重要な技術である。ロジでは、速く泳いだり、あるいは猛獣に悟られないよう静かに泳ぐなど、いくつかの水泳技法が存在する。

を営みながら生計を立てている。牛を受託したブンダは、焼畑の耕地に牛囲いを設置し、牛の糞尿による施肥を始めた。4.3 で触れたロジの施肥法をブンダが採用したことにより、焼畑での作付け年数が長くなったと考えられる。また受託側はこの期間、自由に搾乳することが許されている。しかし、受託中に牛が病気になった場合には、早急に預託者に報告し、対応策についての指示を仰ぐ必要がある。また牛が死んだ場合には、肉を乾燥させて預託者のもとへ届け、牛の死亡について報告しなければならない。このような義務を怠ると、預託を打ち切られることがあるという。

牛の預託への返礼として、サチロンデラの村人がシムンドゥエの村人に対して、しばしば物資やサービスを提供することがある。シムンドゥエの村人は、ウッドランドで生産されるキャッサバやトウジンビエを受け取るが、トウモロコシが不足した場合には、このような農産物の提供は大きな意味をもつ。またウッドランドから木材が提供されることもある。これは調理用の薪木として、あるいは家屋の建築材や牛囲いの木柱として利用される。木材の乏しい氾濫原において、これらは貴重な資材である。そのほか、家屋建築の手伝いや、木製品の製造などをブンダに依頼する場合もある。いっぽうロジの男性たちは、牛を預託する2月から6月までの期間、牛の世話から解放されるという利点もある。相互依存的な関係にある二者間の結びつきは強固なものであり、お互いを親族名称を用いて呼び合うようになっている。<sup>40)</sup>

このような関係が生成した背景には、いくつかの要因があるとみられるが、ここでは次の2点をあげておきたい。1つは、牧童としての労働力の確保の問題である。学校教育の普及によって、牧童の適齢期にあたる青少年の多くが学校に通うようになり、<sup>41)</sup> 従来と比較して長期間にわたり牧童を確保することが容易ではなくなった。また、移牧先で牛の世話を経験したことがある者は、氾濫原とは放牧環境が異なるウッドランドでの放牧は難儀なものであったとも語る。3.1 で述べたように、近年では洪水期にウッドランドに移動する住民が減少したことも、この時期に牧童を確保することを困難にしたと推測できる。

もう1つは、19世紀から続くアンゴラからザンビアへの人々の移動という歴史的な要因である。近年では、アンゴラにおける政情不安にともなって、アンゴラから難民がザンビアへ流入している。このようにして国境を越えて西部ザンビアに移動してきた難民の大半は、難民キャンプではなく、自発的に農村に定住することが知られている〔北川 1996〕。以上のような条件をあわせて考えると、氾濫原の周辺に定住するようになったブンダの人々が、先住者であったロジと個人的な関係を結びながらロジの牧童にかわって牛の世話をみるようになったこ

40) 当事者間の年齢が近ければお互いを「兄弟」と呼び、年齢が離れていれば「祖父・祖母」と「孫」と呼び合う場合が多い。

41) シムンドゥエ村から約2.5キロメートル離れたマラボ (Malabo) 村に小学校が創設されたのは、1941年のことである。

とは、きわめて合理的な変化であったといえよう。

## 6. 氾濫原の漁撈

### 6.1 漁撈の概要

バロツェ氾濫原には多種の魚が生息している。そのうち漁撈の対象となった魚種として、筆者は 29 種を確認した（表 6）。魚は日常の重要な副食源であり、また町の市場に出荷される商品、あるいは物々交換における価値の高い交換財でもある。氾濫原では、洪水が到来し増水が始まった湖周辺を漁場とするヤス漁（1 月）、洪水期に村の周囲で営まれる刺網漁（2～5 月）、洪水が引いた後の湖で行われる刺網漁（5～9 月）、乾季の孤立した微凹地を利用した籠漁（10

表 6 漁撈の対象となる主要な魚種

科	種	ロ ジ 名
ANABANTIIDAE	<i>Ctenopoma ctenotis</i>	mbundu
BAGRIDAE	<i>Suchenoglanis nagamensis</i>	sibutu
	<i>Auchenoglanis occidentalis</i>	singongi
CHARACIDAE	<i>Hydrocyon vittatus</i>	ngweshi
	<i>Hepsetus odoe</i>	mulumeshi
	<i>Alastes lateralis</i>	mbala
	不明	ngwelele
CICHLIDAE	<i>Oreochromis macrochir</i>	mu
	<i>Haplochromis carlotiae</i>	mbuma
	<i>Oreochromis andersonii</i>	njinji
	<i>Tilapia rendalli</i>	mbufu / mbufana
	<i>Tilapia sparmanii</i>	situu (situfu)
	<i>Serranochromis angusticeps</i>	mamunyandi
	<i>Serranochromis macrocephala</i>	njenga
	<i>Serranochromis condingtoni</i>	seo
	<i>Serranochromis robustus</i>	nembwe
	<i>Hemichromis fasciatus</i>	lingwalala
	<i>Pelmatochromis rubustus</i>	seo
CLARIDAE	<i>Clarias gariepinus</i>	ndombe
	<i>Clarias ngamensis</i>	ndombe
MORMYRIDAE	<i>Mormyrus lacerda</i>	mutokoya / likusi / nembele
	<i>Gnathonemus macrolepidotus</i>	nembele
	<i>Marcusenius castelnaui</i>	kapepe
SCHILBEIDAE	<i>Schilbe mystus</i>	lubango
不明	不明	linyonga
不明	不明	liwetete
不明	不明	nangalola
不明	不明	liulungu
不明	不明	kenga

～12月)など、年間をとおして何らかの漁撈が営まれている(図7)。

## 6.2 刺網漁

漁撈に用いる刺網はカニャンディ (*kanyandi*) と呼ばれる。かつては植物繊維を利用して自分たちで刺網を作ったというが、現在はナイロンでできた中国製の既製品を購入している。市販の刺網は長さが18メートル、高さが1.6メートルある。網のメッシュ・サイズには、1インチ(約2.5センチメートル)から3.5インチ(約8.9センチメートル)まで数種類がある。網の下部には沈子(おもり)を等間隔につける。沈子には町で入手した煉瓦などの小片を用いる。また網の上部には浮子(うき)を取り付けるが、これには氾濫原に自生するマメ科植物であるリファリング (*lifalingi*) [*Sesbania sesban* var. *nubica*, Leguminosae] の茎を利用する。1999年に刺網漁に従事したのはD1, H1, J1, M1, Q1の5人の成人男性であった。このうちH1はザンベジ川本流の近辺を主要な漁場とし、他の4名はシムンドゥエ村の近辺で刺網漁に従事していた。以下では、村の近辺での刺網漁について記す。

仕掛けた刺網が水に流されないように、網の両端を近くに生えている雑草に結び付けておく。メッシュが大きな網の場合には、漁場に網をセットしたまま魚を取り外すことができる。しかしメッシュが小さい場合には、村まで漁網を持ち帰ってから1尾ずつ魚を外さなければならず、多くの手間を必要とする。刺網を漁場にセットすることをクラレカ (*kulaleka*)、その場で刺網に掛かった魚を点検して1尾ずつ網から外すことをクノナ (*kunona*)、魚を網から外さずに網ごと持ち帰ることをクヤンブラ (*kuyambula*)、持ち帰った網から1尾ずつ魚を外すことをクコヨトラ (*kukoyotola*) と、それぞれの作業を示す言葉がある。メッシュが小さな網の場合には、夕方に網をセットして、翌朝に網を村に持ち帰ってから魚を外すため、1日の漁獲は1度だけである。しかしメッシュが大きな網の場合は、網を仕掛ける位置を変えない限りは、朝・夕にクノナを行い、1日に2度の漁獲が可能である。

刺網漁は、洪水が始まる1月頃には湖で、2月から5月頃までの洪水期には村の周囲のいたる所で行われ、そして洪水が引いた6～9月頃には再び湖での漁になる(図7, 図8)。シムンドゥエ村の男性が漁場として利用するおもな湖は、村の西方に位置するングリエ湖、メンバ湖、ンドロ湖などである(図9)。冠水した村の周囲を漁場とする場合には、漁者は水面下のリズルやリトンゴ、あるいはムラポといった地形を見きわめて漁網を仕掛けることが重要である。それによって漁獲が左右されるからである。

水面下の地形に自生するいくつかの植物や、シタパやリズルなどで浸水した作物は、魚の餌になると考えられている。たとえばマメ科のマグレ (*mañele*) [*Sesbania sesban*, Leguminosae]、イネ科のシブユ (*sibuyuyu*) [*Oryza barthii*, Gramineae]、アオイ科のリクク (*likuku*) [*Hibiscus caesius*, Malvaceae] などは魚が好む植物であるという。また、ンドンベ (*ndombe*) やシンゴンギ (*singongi*)、ルバンゴ (*lubango*) などの魚種は水中のトウモロコシの茎を好んで食べると、

人々は語る。かつては、11～2月頃に牛囲いを設けた湖畔のリトンゴを選んで、洪水期に刺網をセットすることもあったという。これは堆積した牛糞が魚の餌になると考えられているからである。シムンドゥエ村では、この牛牧畜と結びついた漁法は1990年代初頭まで行われていた。<sup>42)</sup>

シムンドゥエ村の男性2人が1999年7月15日に、刺網漁によって得た漁獲高を表7に示した。D1は3.5インチのサイズの刺網を1張りメンバ湖に仕掛け、M1は1.5インチと1インチの2種類の刺網をングリエ湖にセットした。3.5インチの魚網ではヒレナマズ科のンドンベが7尾かかり、1尾あたりの重量は平均774グラムと大きい。1.5インチの魚網には多種類の魚が合計27尾かかり、1尾あたりの平均重量は約50グラムであった。いっぽう1インチの魚網ではカラシン科のムバラ (*mbala*) に魚種が集中している。他種の5尾をあわせて合計222尾の漁獲があったが、1尾あたりの平均は約7.6グラムとかなり小さい。このように、メッシュ・サイズの違いによって漁獲内容は大きく異なる。

自家消費分を除いて捕獲した魚は、漁期のあいだはほぼ毎朝のように町から氾濫原を訪れる魚商人に売却することが多い。その場合、漁者が魚商人と直接に取引をすることも稀にはあるが、通常は村の女性が仲買人として介在する。この仲買人は、近村からも魚を仕入れ、それらをまとめて魚商人に売却する。洪水期には、魚商人が丸木舟を漕いで魚を仕入れに村まで来る。またそれ以外の時期には、早朝に仲買人がザンベジ川本流まで歩いて行き、専業の漁者か

表7 刺網漁による漁獲高の一例 (1999年7月15日)

魚種 (ロジ名)	漁 者	D1	M1	
	メッシュ・サイズ	3.5 インチ	1.5 インチ	1 インチ
	漁 場	メンバ湖	ングリエ湖	ングリエ湖
<i>mbundu</i>			1 (70)	217 (1,650)
<i>mulumeshi</i>			1 (50)	
<i>mbala</i>				
<i>mu</i>			1 (10)	
<i>mbuma</i>			5 (90)	
<i>mbufu</i>			1 (20)	
<i>njenga</i>			7 (190)	
<i>nembwe</i>			3 (90)	
<i>ndombe</i>		7 (5,420)	7 (700)	
<i>lubango</i>			1 (20)	5 (30)
その他				
合 計		7 (5,420)	27 (1,240)	222 (1,680)

注：実数は尾数、括弧内の数字は重さ（グラム）をそれぞれ示す。

42) 現在では、魚網が盗難にあうことを警戒し、牛囲い跡での漁撈は稀になった。

ら魚を買いつけ、途上で行き会う魚商人に売却することもある。1999 年には、E2, P2, R2 ら、20~30 歳代の女性が魚の仲買の仕事に従事していた。

### 6.3 ヤス漁

ブロジに点在する湖の周辺では、ヤスを用いた突刺漁がみられる（写真 8）。ヤスをムワヨ (*muwayo*) と呼び、氾濫原に自生する葦（リタカ, *litaka*） [*Phragmites* sp., Graminae]<sup>43)</sup> を利用した柄（長さ約 180 センチメートル）に鉄製の鏝（長さ約 35 センチメートル）が取り付けられている。鏝の先端部から 16 センチメートル辺りまでには、突き刺した獲物が外れないように複数の「かかり」が刻まれている。ヤス漁に携わるのは 10~20 代の青少年であり、彼らの多くは牛の世話をする牧童でもある。

ヒレナマズ科のシドンベを対象としたヤス漁は、湖に洪水が達する 1 月頃の数日間、深夜から早朝にかけて行われる。ミルング (*milungu*) と呼ばれるこの漁撈がみられるのは、湖が分布する氾濫原の中央域に限定されている。シムドゥエ村では、村の西方に位置するングリエ湖とメンバ湖の周辺がヤス漁の主たる漁場である。

12 月から 1 月にかけてザンベジ川を溢れでた洪水は、ムラボなどの微凹地を伝って徐々に氾濫原一帯に拡散する。その過程において、水路と化したムラボから湖に水が流れ込むと、湖の水位は上昇し溢水が始まる。湖底に潜むシドンベは産卵のために、水深が 20~30 センチメートルとなった湖の周辺部にあがってくる。少年たちは 3~5 本のヤスを手に持ち、複数のヤスを同時に投げて獲物を射止める。大きなシドンベは体長が 50 センチメートルを超える。なかには 1 晩で 30 尾ものシドンベを捕獲した少年もいた。ヤス漁が行われるのは移牧をひかえた時期であり、湖畔のリトンゴには牛囲いが設けられている（図 8, 図 13）。牧童たちは、



写真 8 ヤス漁で射止めたヒレナマズ

43) Peters [1960] による。



牛囲いに隣接して建てられた小屋に寝泊まりして、ヤス漁に従事する。

湖の溢水時を待って行われるこのヤス漁は、洪水期の幕開けを告げるような性質を帯びている。ロジでは初物の魚をムタマ (*mutama*) と呼び、捕獲した者は食わずに他人に分け与えるべきであるとか、主食のブホベと一緒に食べてはいけないなど、いくつかの禁忌が付与されている。氾濫原の村々では、ヤス漁で捕獲したシンドンベがムタマとなっており、ヤス漁をもって漁撈シーズンの始まりとみなしていると考えられる。事実、先に記した刺網漁が本格的に開始するのは、このヤス漁の終了後であり、またこの時期から刺網漁に不可欠な丸木舟の利用が可能となる。

#### 6.4 カタンバ漁

洪水期の 3～4 月頃に冠水した村の中では、カタンバ (*katamba*) と呼ばれる簡単な仕掛けを使った漁撈が行われる (図 8)。2001 年の洪水期に、このカタンバ漁に従事したのは女性 2 名 (L2, J5) と少年 1 名 (M5) であった。

カタンバとは、氾濫原に自生するマメ科のルサンボ (*lusambo*) [*Chamaecrista* sp., Leguminosae] の茎を主材料とした「巻き簀」状の漁具であり、広げたときの横幅が 135 センチメートル、高さが 50 センチメートルほどの大きさである。50 センチメートルの長さに切りそろえたルサンボの茎 (直径は 3～5 ミリメートル) を 300 本程度並べ、アオイ科のリクク繊維を 5 本使って編み上げる。またルサンボの代わりに葦を材料とする場合もある。

20 センチメートルほど冠水した村の中の土地に、カタンバは仕掛けられる。この時、カタンバの両端は閉じずに筒状に丸めて立てる。この隙間が魚の侵入口となる。カタンバの中にはトウモロコシの穀粒やシロアリの巢の破片などを入れておく。これらの餌に引き寄せられ、カタンバに魚が侵入する。仕掛けて 1 時間ほどしてから、漁者はカタンバに近づいて侵入口をすばやく閉じ、中にいる魚を手ですくい上げる。この漁は 1 日に 1～3 回程度、昼間に行う。1 度の漁で、体長が 4～9 センチメートルの小魚が 10 尾ほど捕獲でき、その日のうちに自家消費されることが多い。

#### 6.5 籠漁

氾濫原では、刺網漁が終了した 10 月から 12 月頃にかけて、籠状の漁具を用いた漁が成人女性らによって行われる (図 7)。これに使用する籠はリシゴ (*lishiño*) と呼ばれ、葦を主材料とする。漁場は、水深が 20～50 センチメートル程度になったシワタタなどの小規模な凹地である (写真 9)。

シワタタは、洪水期には他の水場と繋がるが、乾季には孤立する。洪水期に流入した魚類は、乾季にはシワタタ内に閉じ込められるため、籠を用いて容易に捕獲できるようになる。高齢者を除いた村の成人女性たちは、あらかじめ日を定め、各自が 1 つずつリシゴを持って一緒に漁場へ行き、水の中に立ってそれぞれが魚をすくい取る。



写真 9 成人女性によるシワタタでの籠漁

小魚のことをナカテンゲ (*nakatenge*) と総称するが、籠漁では体長 5~10 センチメートル前後のナカテンゲが主たる捕獲の対象である。1 人あたりの 1 回の漁獲高は 800~1,200 グラム程度である。これらは自家消費するほか、乾燥魚にしてモンゴの町などで売却することもある。

## 7. その他の生計活動

### 7.1 狩猟活動

頻度は低いが、氾濫原で男性が行う狩猟についても言及しておきたい。シムンドウエ村でみられた狩猟の方法としては、カヤワ (*kayawa*) と呼ばれる罟を用いたもの、槍によるもの、そして犬猟があげられる。カヤワや槍で捕獲するのはおもに野鳥<sup>44)</sup> である。シムンドウエ村では、D1 と J1 がカヤワ猟に、J4 が槍猟に従事していた。

カヤワ猟は主として乾季に行われ、洪水が引き始めた 5~7 月にはムラボのような湿地が、それ以降は湖の浅瀬などが猟場となる。カヤワには 2 種類ある。1 つは 2 本の葦の竿を立て、その間に格子状の網を張った罟である。もう 1 つは 2 本の竿の間に 1 本の紐を張り、鳥の首が通る程度の輪状の紐を 10 本ほど吊した罟である。カヤワでは、リチクィ (*licikwi*, spur-winged goose) やノンゴロ (*nongolo*, open-billed stork), ナシカンボ (*nasikambo*, sacred ibis) などの野鳥が捕獲できるが、ときにはオオトカゲ (ホパニ, *hopani*) が掛かることもある。

槍猟には漁撈用のヤスを転用する場合が多く、乾季に鳥が密集する草薮に槍を投げ込んで捕獲する。獲物となる鳥は、ノンゴロやカングンビ (*kañumbi*, cormorant) などである。犬猟は牛の放牧時に犬を連れて行き副次的になされることが多く、オオトカゲやカワウソ (ニビ, *nibi*) などが狩猟の対象となる。また、カメ (クル, *kulu*) は素手で捕獲されることも多いが、

44) O'sullivan [1993] には、ロジ語による鳥類の方言が 100 種類以上あげられている。そのうち筆者が確認したのは 24 種である。

漁網に掛かる場合もある。

## 7.2 採集活動

氾濫原では、女性による野草の採集も盛んである。食用となる野草は栽培された葉野菜とともにムロホ (*muloho*) と呼ぶ。とくにリズルでの除草時には、耕地に自生するテペやセシュングワなどの野草を採集し、副食源として利用する。

スイレン科のリオマ (*lioma*) [*Nymphaea lotus*, Nymphaeaceae] は、洪水期に冠水するムラボなどに自生するが、水が引いた後に地下茎を残して地上部は枯死する。ムラボにシタパを開墾するとき、この地下茎が掘り出されることが多い (図 8)。1999 年 9 月 20 日、シムンドウエ村のある女性はシタパの耕起時に、43 個 (総重量 1,390 グラム) のリオマの地下茎を掘り出した。リオマの地下茎も重要な自家消費用の食糧である。人々は洪水期にリオマの開花を見ており、その生育地を知っている場合が多い。つまりこの採集活動は、ある程度予測されたものであるといつてよい。

そのほか、氾濫原に自生する植物では、パピルス (クマ, *kuma*) [*Papyrus*, Cyperaceae], あるいはイネ科の葦やムスヘラ (*musuhela*, 学名不明) などが重要であり、住居の建材などとして用いられる。またパピルスは、ムセメ (*museme*) とリシャシャ (*lishasha*) と呼ばれる 2 種類のゴザの材料として高い価値をもつ。パピルスの茎を縦割りにして作った目の細かいゴザがムセメであり、茎をそのまま用いた目の粗いゴザがリシャシャである。また葦は前述したとおり、漁具や狩猟具の材料としての利用頻度も高い。モングの町などに運べば、パピルスや葦は売ることでもある。

洪水期のおもな調理用の燃料はウッドランドから調達した薪木であるが、乾季には牛糞とあわせてマメ科のマグレやリファリンギ、あるいはタデ科のリンブンブエやワワタンガ (*wawatanga*) [*Polygonum limbatum*, Polygonaceae] など、氾濫原に自生する多様な植物を採集して、燃料として利用する。

## 7.3 交易活動

氾濫原の村々では、従来から盛んに氾濫原の外部との交易に従事してきた。すでに述べたとおりミルク、牛、魚、あるいはパピルスや葦をはじめとする植物資源など、多様な産物が氾濫原から町に運ばれて売却されている。

しかしこの地域における交易は、市場で売買される取引きだけではない。たとえば、牛の預託先であるウッドランドのブンダから、キャッサバやトウジンビエ、あるいは木材や木製品などが氾濫原にもたらされるのも、交易のひとつの形態である。現金が介在しない物々交換はクチンチャ (*kucinca*) と呼ばれ、時に重要な機能を果たすことがある。このことを示す次のような例がある。

1999 年には氾濫原の洪水位が高く、シムンドウエ村でのトウモロコシ生産は不作であった。

主食用のトウモロコシが欠乏した世帯〔M〕では、貯蔵していた乾燥魚を遠隔地まで運び、食糧用の作物と交換した。世帯〔M〕ではこの年、世帯主の M1 が刺網漁によって多くの漁獲を得ており、その魚を乾燥させて貯蔵しておいた。妻の M2 は、7 月のある日、バロツェ氾濫原から東へ 150 キロメートルほど離れたカオマ県（図 1）までバスを利用して魚を運び、家々を訪問してキャッサバやトウモロコシと交換した。近くに大きな漁場がないカオマ県では、魚の需要が大きく農産物との交換比率も高い。こうして、世帯〔M〕では食糧不足をうまくしのいだのである。バスを利用して遠隔地に物資を運び、物々交換するようになったのは、交通網が整備された 1970 年以降のことである。それまでは、歩いて行ける範囲内にあるウッドランドの村々を訪ねて、物々交換していたという。

「洪水が大きい年には、魚も多い」（*Haiba mezi ki amañata, litapi ziba zeñata*）と人々は語る。バロツェ氾濫原では、洪水期間が長い年には、それに比例して漁獲高が大きくなる傾向がある〔Gils 1988〕。それは人々の説明が妥当であることを示している。また大洪水の年には、広い地域で多くの雨が降るため、カオマ県のようなウッドランド地帯は豊作に恵まれると語る者もあった。乾燥魚をウッドランドまで運んで農産物と交換する活動は、氾濫原とウッドランドにおける異なった生態環境の条件を背景としており、人々はそのような条件を十分に認識しているのである。

## 8. 総括と討論

ここまで、バロツェ氾濫原の中央域であるブログを中心として生業について述べてきた。氾濫原の生態環境は、季節的に水位の昇降が繰り返されるとともに、数年に 1 度は大洪水に見舞われるという特質をもっている。こうした環境のもとで営まれる生業を総括し、その諸特性について検討を加えておきたい。

### 8.1 洪水と生業のリズム

氾濫原では、農業や牛牧畜、あるいは漁撈などの複数の生業が、洪水がつくる水文条件の季節的な変化に合わせて営まれている。

「リズル」のようなマウンド状の微高地を利用した耕地では、洪水が到来する前の雨季の開始時（11～12 月）に播種がなされる。その後、2 月頃には微高地にも洪水は押し寄せ始め、作物は水位の上昇と競争するように生育し、そして洪水水位がピークとなる 4 月頃に収穫される。いっぽう微凹地であるムラボを開墾したシタパの土壌は、洪水によって肥沃度が回復し、かつ適度な水分を含んでいる。この耕地では、洪水が引いたあとの乾季（9 月）に播種し、収穫は微凹地の冠水が始まる 1 月頃となる。また、集落の斜面に造成されたンダミノや、雨季と乾季に場所を変えて開墾するムコメナでも、季節的な洪水と密接に関連した水分状況に応じた作付けがなされている。このように氾濫原では、異なる地形の比高差と洪水がつくる空間のグラ

レーションに適応した多様な農業が展開している。そしてその結果として、12月から翌年の6月までの期間にわたり、ほぼ連続的に作物の収穫が可能となるシステムが構築されている。

同じような傾向は、牛牧畜についてもみられる。すなわち、水位の昇降によって放牧の適地となる場所は季節的に異なるため、人々は季節ごとに放牧地を選択している。また牛囲いは、乾季には施肥を目的として「リズル」などの耕地に設けるが、冠水が始まる時期には砂地であるために泥濘の少ない湖畔のリトンゴへ移転させている。このように牛群を長期間にわたって手許に置くための方策が編み出されており、氾濫原では長期間におよんで牛糞やミルクなどを利用することが可能となっている。漁撈においても同様に、時間的・空間的に変異する多様な水環境を利用した多彩な漁法が認められる。

以上のような空間利用の様式と深く関わっているのが、微地形の詳細な認識・分類である。比高差を主たる基準とするこの地形認識は、洪水による浸水状況や土壌中の水分量などと密接に対応している。一般的に、ひとつの言語が特定の分野に属する豊富な語彙をもっていることは、その分野が生活のなかで占める重要性や、人々の強い関心を示しているといっていよい。<sup>45)</sup> ロジの人々が氾濫原の微地形を詳細に分類し認識していることは、彼らが氾濫原のもつ潜在的な豊かさを存分に引き出していることと不可分の現象であるといえよう。

## 8.2 氾濫原で展開した生業複合

氾濫原ではさまざまな生業が複合的に営まれている。それぞれの世帯がどの生業にどれだけ比重をかけるのかは一様ではないが、ロジには環境利用のジェネラリストとしての特性が認められる。グラックマンはこの点に関し、「ロジは農民であり、牧畜民でもあり、そして漁民でもある」と述べ、このように複数の生業が存在することを「混合経済」(mixed economy)と呼んだ[Gluckman 1941]。基本的にロジでは、主食の粉粥餅(ブホベ)の材料は農業から供給され、副食(ブスンソ, busunso)の大部分は農業以外の生業から調達される。複数の生業を営むということは、主食・副食のそれぞれの食材を自給できる手段をもつことを意味する。

いくつかの生業を営むことには、単に生業の数や食材の種類が複数あるという以上の意味がある。たとえば、ミルクや魚などの交易によって、不足する主食のトウモロコシが調達されていることは、他の生業が農業を補完する機能をもつことを示している。とくに数年に1度は起こる大洪水の年には、豊かな漁獲を農産物と交換することによって主食の確保が果たされている。

氾濫原の諸生業は、いくつかの局面において有機的に連関していることも指摘しておきたい。その代表的な例として、耕地に牛囲いを設けて行う施肥法があげられる。放牧から囲いに戻った牛が落とす排泄物が肥料となるこの方法は、洪水によって季節的に更新される広大な草

45) たとえば、極北に生きるエスキモーの人々が生活の必要上のため、「雪」に関する語彙を数多くもつことなどが広く知られている[宮本1987]。

地の資源を、牛を媒介することによって糞尿に変換し、点在する耕地に集約させる養分濃縮型の有畜農業<sup>46)</sup>と呼びうるものである。氾濫原でもっとも重要な耕地である「リズル」は、シタパとは異なり各自がその面積を自由に拡大することはできない。そのような「リズル」を持続的に利用するためには、牛囲いによる施肥が不可欠となる。また「リズル」のような微高地に牛囲いを設けることは、農業の面ばかりではなく牛牧畜の側にも有益な点がある。洪水が引いて間もない時期は、氾濫原の微凹地の土壌は多量の水分を含んでおり、牛囲いを設けるのに適さない場合が多い。そのため、微凹地と比較してより乾燥した微高地に牛囲いを設置することは、氾濫原の生態にあった合理的な方法でもある。

冠水した収穫前の耕地や、湖畔のリトンゴに設けられた牛囲いの跡などを漁場とする刺網漁は、「陸域であって、水域でもある」という氾濫原の空間的な特性を活かしたものである。「陸域」である時には耕地や牛囲いの設置場所として、そして「水域」である時には漁場として、水位の昇降に応じて1つの空間を多重的に利用する方法は、氾濫原であるからこそ生起した生業複合であるといってよい。シタパの耕起と共時的に行われるスイレン科植物の地下茎採集も同様の特性をもつ。すなわち、スイレン科植物が繁殖する「水域」的な環境は、そこが「陸域」に変化した時に耕作地として利用できるようになり、その結果として農作業に採集活動という新たな要素が付加されるのである。

氾濫原に居住するロジの人々は、このように諸生業を複合的に営むなかで、生業の安定性や持続性、あるいは生産性や効率性を高めてきたものと考えられる。そして、こうした特徴は、すべて定期的に洪水が起こる氾濫原の生態的特性に適応して展開してきたものである。このような、洪水のリズムに合わせて展開する氾濫原の生業は、先行研究が行われてから半世紀を過ぎた現在でも、基本的に大きくは変化していない。

### 8.3 氾濫原における水利用技術の特性

氾濫原では、土壌の水分含有量や洪水による湛水の深さは、それぞれの季節や微地形によって大きく異なる。そのため、水とどのように関わるかという問題は、氾濫原で生業を営むうえで不可避のものである。すでに述べたように、氾濫原の農業は、微細な地形差ごとに耕地を造成し、水分状況の違いに応じて各々の作付け時期も異なるものであった。このような水文条件の季節的な変化に対応した空間の利用法は、大きな意味でのロジの水利用技術であるとみなすことができる。

そのほかにも氾濫原の農業には、それに適した水分環境を創出することを目的とした細やかな取組みが認められる。たとえば、低地にある耕地のシタパから、比高の高い耕地のンダミノへのトウモロコシの移植（クスガ）や、ムコメナの周囲に堀（リングンジャ）を設けること

46) 福井勝義〔1999〕によれば、有畜農業とは農と牧が有機的に結びついた農業システムであり、有機的な結びつきがみられない半農半牧と区別すべきであるとしている。

は、作物が浸水することを避けるための工夫であるといつてよい。いっぽう植穴（リティナ）を作って播種することは、集水効果や保水効果を意図したものであると考えられる。また、乾燥した種子あるいは水に浸した種子を、シタパの内部の地形差に応じて使い分けていることは、土壌の水分含有量が微地形ごとに異なることに対応した技術として位置づけることができる。

ここにあげた水利用に関わる方策は土木工学的な方法ではなく、すべて環境を大きく変えない技術である点に特徴がある。氾濫原に住む人々は、自然を力づくで押さえ込むのではなく、自然の水文条件に適合した小規模な技術を用いることによって持続可能な生産を維持してきたといつてよい。田中耕司〔1988〕が比較技術論的な立場からアジアの稲作を論じるうえで提唱する「立地適応型技術」と「立地形成型技術」<sup>47)</sup> といった2つの概念を用いて考えるならば、バロツェ氾濫原で営まれてきた生業の技術は、「立地適応型」としての特性をもつ。

いっぽう、王権がイニシアチブをとることによって導入された技術は、「立地形成型」の特徴をもつ。たとえば18～19世紀には、氾濫原の外縁にある耕地（シシャンジョ）において、排水路の掘削事業が多数の人員を動員して行われた。それは洪水期の王宮があるリムルンガから、南のセナンガ県まで続く大規模なものである。そしてローカル・チーフや村長の統括のもとに、雑草の除去などの水路を管理する作業が地域ごとの住民によってなされていた。<sup>48)</sup> またロジでは、19世紀のココロ侵入の時代まで、王への共同奉仕労働と軍事を目的としたマコロ・システム（*makolo system*）と呼ばれる組織が存在し、王宮のマウンドを盛り上げるための土木事業も遂行されていた〔Gluckman 1941; Reefe 1983〕。このようにロジ王国は、自然資源を管理・利用するために、村レベルとは異なる技術を用いて、その体制の強化をはかっていった側面をもつ。

#### 8.4 開放系の核としての氾濫原

バロツェ氾濫原における生活や生業は、その内部で完結しているのではなく、氾濫原の外部を組み込むことによって成立している。氾濫原で大規模な牛群を飼養するためにはウッドランドの存在が不可欠であり、また氾濫原で生活する人もウッドランドに移動する必要があった。氾濫原で使用されている生活用具を見渡してみても、氾濫原の外部に頼らなければ生活が成り立たないことは明白である。すなわち、丸木舟や牛囲いに必要な木柱、農耕に用いる鋤の柄などの木製品は氾濫原内では調達できないし、鋤の刃となる鉄資源も氾濫原の外部から入手される。

47) 「立地適応型技術」とは「環境を改変することなく、むしろその環境が与えてくれる条件をそのまま積極的に利用して稲を栽培しようとする技術」であり、「立地形成型技術」とは「環境へ積極的に働きかけて新たな稲の栽培立地を形成しようとする技術」である〔田中 1988〕。

48) 英国保護領となって以降、排水路を整備する共同作業は徐々に衰退してゆき、シシャンジョの耕作も廃れていった〔Allan and Gluckman 1960〕。

氾濫原の住民の側からみれば、ウッドランドを居住域とする人々は、洪水の影響を受けやすい農業生産の不安定さを補完するためのパートナーとしての意味をもつ。先行研究によれば、主としてロジは氾濫原を、そして他の民族集団は氾濫原の周辺部や外部を居住域とし、この地域では氾濫原の産物である魚や牛とウッドランドの産物であるトウジンビエやキャッサバ、あるいは鉄資源や木材や樹皮などの物々交換や贈答が、以前から盛んであったという [Gluckman 1941]。バロツェ氾濫原を中心とし、周囲に広がるウッドランドを含む地域は、開放系の社会経済圏をなしているものと位置づけることができる。この開放系では、異なる生態環境のあいだを牛や人が季節的に往還することを常態とし、また異なる生態環境における居住者間には物々交換などの相互関係が存在する。

しかし、歴史的にみれば、その様相には変化した面も認められる。シムンドゥエ村を事例として、1960年代以降の変化について検討しておこう。現在では、洪水時にもウッドランドに移動せず氾濫原内に留まる住民の数が増えたが、以前は住民の大部分がウッドランドにある分村に移動していた。そして分村に移動した者が、氾濫原での農作業などに従事する場合には、丸木舟で氾濫原とのあいだを往復したり、あるいは微高地に設けた出作り小屋に寝泊まりして作業にあたっていたという。また当時は、ブンダがもたらしたウッドランドでの焼畑農耕をシムンドゥエ村の住民も営んでいたが、現在はブンダだけが継続している。

洪水期に牛をウッドランドに移牧した際に、かつてはシムンドゥエ村の住民自身が牛の世話をしていた。しかし近年では、ウッドランドに居住するブンダに牛群を預託するように変化した。そして、ブンダの焼畑耕地の土壌肥沃度を維持するうえで、預託された牛が大きな意味をもつようになっている。また、洪水の賜物ともいえる氾濫原の魚と、ウッドランドの農産物との物々交換にも変化が認められる。すなわち、従来は徒歩で移動できる範囲内で取引がなされていたが、近年ではバスを利用した遠距離間での取引がみられるようになってきた。このように、氾濫原とウッドランドのあいだの関係にはいくつかの変容が起こった。

しかし、氾濫原を中心とする開放系という基本的な枠組みは、現在でも維持されていることを強調しておきたい。ロジが氾濫原の環境利用に特化した人々であるのに対し、焼畑農耕の技術をもつブンダはウッドランドという生態環境を占めてきた。この両者のあいだに牛を媒介とした関係が創出されたことは、従来から存在した開放系の社会経済圏の構造的な強化であるし、また交易の範囲が広がったことは、この開放系の外縁の拡大とみなすことができる。

ロジ王国が、その領内に異なる生態環境を含み、かつ多数の民族集団を内包する社会を形成した背景には、バロツェ氾濫原を核とする開放系の社会経済圏が成立しており、そして異なる生態環境を生活域とする民族集団が多様な生業様式を発達させたという地域の特性があったのである。



## 8.5 アフリカにおける氾濫原とその社会

アフリカの氾濫原などに展開したいくつかの「河辺社会」(riverine society)の生業を比較検討した松田凡[1988]は、その共通点として河川を利用した農業生産がもつ安定性と不確定性の二面性を指摘するとともに、農業の不確定性を補完するための方策にはバリエーションがあることに言及している。すなわち、ザンベジ川中流域のトンガ,<sup>49)</sup> チャド湖盆地のコトコやマサなどではいくつかの異なるタイプの耕地を利用することでそれを克服し、いっぽうナイル川上流域スッド地帯のディンカやヌアー、エチオピアのオモ川下流氾濫原のカロ、ニャンガトム、ダサネッチなどの民族集団では農業のほかには牧畜や漁撈など複数の生業を営むことによって農業を補完している。またニジェール川内陸三角州では、農耕民(ソンガイ、マルカなど)、漁撈民(ボゾ、ソモノ)、牧畜民(フルベ)のあいだに分業がすすみ、生産物の交換がみられるという。

興味深いことに、バロツェ氾濫原ではこれらの3つの特徴がすべて認められる。すなわち人々は、本稿で明らかにしたように、洪水位の変化に対応した微地形の詳細な認識に基づいて複数のタイプの耕地を利用することによって食糧生産を安定させ、多様な生計活動を営むことによって不安定な農業を補完すると同時に、それらを複合させて持続性や生産性をさらに高めている。また、氾濫原の外部との交易をとおして相互依存的な関係を構築し、多民族の共生を可能にしてきた。

歴史学者リーフは、中部アフリカにおける歴史のなかで氾濫原という生態環境が、時には集権的な政治体制の形成基盤となったことを指摘し、そのような氾濫原の代表的な例としてウベンバ凹地、ルアプラ川下流域の氾濫原、ザンベジ川上流域のバロツェ氾濫原などをあげている[Reefe 1983]。ウベンバ凹地ではルバ王国が、ルアプラ川氾濫原ではルンダ(カゼンベ)王国<sup>50)</sup>が、そしてバロツェ氾濫原ではロジ王国が形成された。

バロツェ氾濫原は、季節的な洪水がもたらす恩恵に浴することによって多様な生業を営むことができる豊かな空間であった。ここでいう豊かさとは、必要な食糧や物資を持続的に得ることができるということである。またこの豊かさは、周囲に広がるウッドランドという生態環境を組み込んだ開放系の社会経済圏によって支えられていた。このような意味において、乾燥地が卓越する中南部アフリカの内陸域のなかで、バロツェ氾濫原を核とする一帯はきわめて豊かな地域であるといつてよい。北方のルバ王国やルンダ王国から来た人々や、南のズールー王国から逃れて移動してきたコロロなど、さまざまな集団がバロツェ氾濫原に惹きつけられ、覇権

49) 本稿の2.2で述べたように、ザンベジ川中流域では、カリバ・ダム建設にともなって住民が強制移動させられ、現在のトンガの生業は大きく変化している。

50) このルンダ王国は、1.1で触れたルンダ王国から移動した人々によって18世紀に形成され、カゼンベ王国とも呼ばれている[Roberts 1976: 94]。

を競った大きな理由の1つは、この地域がもつ豊かさにあったといえよう。

従来、アフリカにおける生業研究は、熱帯雨林、ウッドランドやサバンナ、あるいは半砂漠などを対象としたものが主流であり、氾濫原を正面からとりあげた研究の蓄積はそれほど多くはなかった。しかし熱帯アフリカ全体に占める氾濫原の面積は 3,000 万ヘクタールであり、また内陸大盆地や小低地などの低湿地を含めると総面積は 2 億ヘクタールを超え [若月 1995]、このような地形の空間的な広がりには決して小さなものではない。氾濫原の環境特性の把握とそこで練り上げられてきた人々の営為への理解は、広くアフリカにおける地域形成や社会編成について検討を深めるための重要な課題であるといわなければならない。

#### 謝 辞

本研究は、文部省科学研究費国際学術研究「中南部アフリカにおける在来農法の持続性評価に関する環境農学的研究」（研究代表者：荒木茂）に研究協力者として参加して得た資料に基づいている。調査にかかる費用の一部は三菱銀行国際財団からも支援を受けた。調査の準備段階から報告をまとめあげるまで掛谷誠先生（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）には一貫して指導いただいた。荒木茂先生（京都大学大学院同研究科）は調査地において指導くださり、太田至先生（京都大学大学院同研究科）は本論文の草稿の段階で貴重な助言をくださった。また査読の過程において、本誌編集委員の先生方からも細部にわたって有益なコメントをいただいた。ザンビアでの 2 度にわたる滞在期間中、ザンビア大学の Obed Lungu 先生（農学部）、Nyambe Sumbwa 先生（教育学部）、ザンビア農業省に派遣されていた二木光博士（国際協力事業団）をはじめとする多くの方々から助言・協力を賜った。最後になったが、調査期間を通じてロジの友人たちには本当にお世話になった。とくにシムドゥエ村の皆様は、私に Wamundila という名前を与えてくれ親しくつきあってくださった。記して謝意を表したい。

#### 引 用 文 献

- Allan, W. and Gluckman, M. 1960. Preface. In Peters, David U. *Land Usage in Barotseland. Rhodes-Livingstone Institute Communication No. 19*. Lusaka: Rhodes-Livingstone Institute, pp.ii-xiv.
- Beerling, Marie-Louise. 1986. *Acquisition and Alienation of Cattle in the Traditional Rural Economy of Western Province, Zambia*. Mongu: Department of Veterinary and Tsetse Control Services.
- Brown, Ernest D. Jr. 1998. *The Heritage Library of African Peoples Lozi*. New York: The Rosen Publishing Group.
- Central Statistical Office. 1994. *Census of Population, Housing & Agriculture 1990 Descriptive Tables Volume 9 Western Province*. Lusaka: Central Statistical Office.
- Colson, Elizabeth. 1971. *Kariba Studies IV. The Social Consequences of Resettlement. The Impact of the Kariba Resettlement upon the Gwembe Tonga*. Manchester: Manchester University Press.
- 福井勝義. 1999. 「自然と民族のアフリカ」 福井勝義・赤阪 賢・大塚和夫著『アフリカの民族と社会』世界の歴史 24. 中央公論社, 11-147.
- Gils, Hein van. 1988. *Environmental Profile Western Province, Zambia*. Enschede: International Institute for Aerospace Survey and Earth Sciences.
- Gluckman, Max. 1941. *Economy of the Central Barotse Plain. Rhodes-Livingstone Institute Paper No. 7*. Lusaka: Rhodes-Livingstone Institute.
- Harlan, Jack R. and Pasquereau, Jean. 1969. Décrué Agriculture in Mari, *Economic Botany* 23: 70-74.

- Jalla, A. 1996. *Litaba za Sicaba sa Malozi*. Lusaka: Bookworld Publishers.
- 北川文美. 1996. 「難民—南部アフリカにおける越境と編入—」青木 保他編『移動の民族誌』岩波講座文化人類学 第7巻. 岩波書店, 205-232.
- Kuomboka-Kufuluhela Committee. 1993. *Kuomboka Ceremony Background Information*. Lusaka: Zambia Educational Publishing House.
- リヴィングストン, デヴィッド. 1977. 『アフリカ探検記』世界探検全集 8. 菅原清治訳, 河出書房新社.
- Mainga, Mutumba. 1973. *Bulozi under the Luyana Kings Political Evolution and State Formation in Pre-colonial Zambia*. London: Longman.
- 松田 凡. 1988. 「オモ川下流低地の河岸堤防農耕—エチオピア西南部カロの集約的農法—」『アフリカ研究』32: 45-67.
- 宮本伯人. 1987. 『エスキモー 極北の文化誌』岩波新書. 岩波書店.
- Murdock, G.P. 1959. *Africa: Its peoples and their Culture History*. New York & Toronto & London: McGraw-Hill Book Company.
- ピアス, フレッド. 1995. 『ダムはムダ 水と人の歴史』平澤正夫訳, 共同通信社.
- O'Sullivan, Owen. 1993. *English-Silozi Dictionary*. Lusaka: Zambia Educational Publishing House.
- Peters, David U. 1960. In Smyth, N. W. ed., *Land Usage in Barotseland*. Rhodes-Livingstone Institute Communication No. 19. Lusaka: Rhodes-Livingstone Institute.
- Reefe, Thomas Q. 1983. The Society of the Eastern Savanna. In Birmingham, David and Martin. M. eds., *History of Central Africa Volume One*. London & New York: Longman, pp. 160-204.
- Richards, A. and Widdowson, W. 1937. A Dietry Study in Northern Rhodesia, *Africa* 9: 166-196.
- Roberts, Andrew. 1976. *A History of Zambia*. London & Ibadan & Nairobi: Heinemann.
- 田中耕司. 1988. 「稲作技術発展の論理—アジア稲作の比較技術論に向けて—」『農業史年報』2: 5-26.
- Trapnell, C.G. and Clothier, J.N. 1937. *The Soils, Vegetation and Agricultural Systems of North-Western Rhodesia*. Report of the Ecological Surveys. Lusaka: The Government Printer.
- Turner, V.W. 1952. *The Lozi Peoples of North Western Rhodesia Ethnographic Survey of Africa, West Central Africa Part III*. London: International African Institute.
- 若月利之. 1995. 「内陸小低地における西アフリカ型稲作」渡部忠世監修, 農耕文化研究振興会編『アフリカと熱帯圏の農耕文化—農耕の世界, その技術と文化 (II)—』大明堂, 95-123.
- Whitby, Pauline. 1973. *Zambian Foods and Cooking*. Lusaka: The National Food & Nutrition Programme.